

F 29
MI. 21

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50^{6m} 1 2 3 4 5

始



27. 2. 14.

2E-175

レ



新譯繪入

新ア
ラビ
ヤ

ニ
ナイト

上巻



~~F29~~
~~A81~~
/2

F29
M121

71-577

2I-175

(i)



PREFACE

Mr. Mikami, whose excellent translation of Stevenson's *New Arabian Nights* is now on the eve of publication, has asked me to write a preface for the work. I have acceded to the request with great pleasure; but the name of Robert Louis Stevenson is too well known to those Japanese who are interested in English literature to need any introduction from me. The following remarks, however, may not be altogether out of place.

The New Arabian Nights is interesting to all lovers of this great writer, because its publication marked a turning-point in his literary career. Until that time he had produced only essays, most of which were subsequently embodied in his *Memories and Portraits*, *Familiar Studies of Men and Books*, and *Virginibus*

4107-97757
317-4777
France. It was based, says Stevenson's biographer, upon a story told by a strolling French actor and his Bulgarian wife. Stevenson had much talk with them, taking great pleasure in their company and delight in hearing of their experiences. They were very poor; and when his story appeared in print, he sent to the pair the money it brought him, and he received a most charming letter of thanks.

Thus the book was written in different parts of the world, for he was constantly travelling in search of health. With the appearance of *The New Arabian Nights* in book-form in 1882, his position as a writer of fiction was assured; and subsequent works served to enhance his reputation. In the following year appeared *The Treasure Island*, which has been pronounced to be the best book of adventure since *Robinson Crusoe*; it certainly is the finest in recent times, and its real hero, John Silver, is one of the

Puerisque. The first story of his to be printed was *A Lodging for the Night*, the materials for which he had gathered when he wrote his essay on François Villon which is included in his *Familiar Studies*. The two principal stories in the book, *The Suicide Club* and *The Rajah's Diamond*, were written, the former in England and Scotland and the latter in France. The hero of these tales was, as one might have expected from the title of the book, not Harour-al-Rashid; Stevenson possibly thought the Commander of the Faithful too antique and Bagdad too far removed for his purpose; at any rate he took for his hero Prince Florizel, son of the King of Bohemia, in Shakespeare's *Winter's Tale*. *The Sire de Malétroit's Door* was conceived in France and written at Penzance in England. *The Pavilion on the Links* was begun in London and completed in California. *Providence and the Guitar* was written in

~~47-577~~

目次

自殺俱樂部

乳脂饅頭物語……………一

醫者と大靴物語……………九七

二輪馬車冒險物語……………一六

一夜の宿……………二五

immortal characters in fiction. *The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde* is enthralling in its weirdness; and *Prince Otto* is considered by some of his admirers as the most characteristically Stevensonian of his novels. Although he wrote many other stories of high quality, these three are sufficient in themselves to rank him with the great writers of the later Victorian era. Some critics have predicted that Stevenson's essays will outlive his novels; but the latter will not readily die. The best among them will live when most of his contemporaries are forgotten. Special interest, then, attaches to *The New Arabian Nights*, because it first turned Stevenson's genius and energy to that branch of literature in which he has won such high and enduring fame.

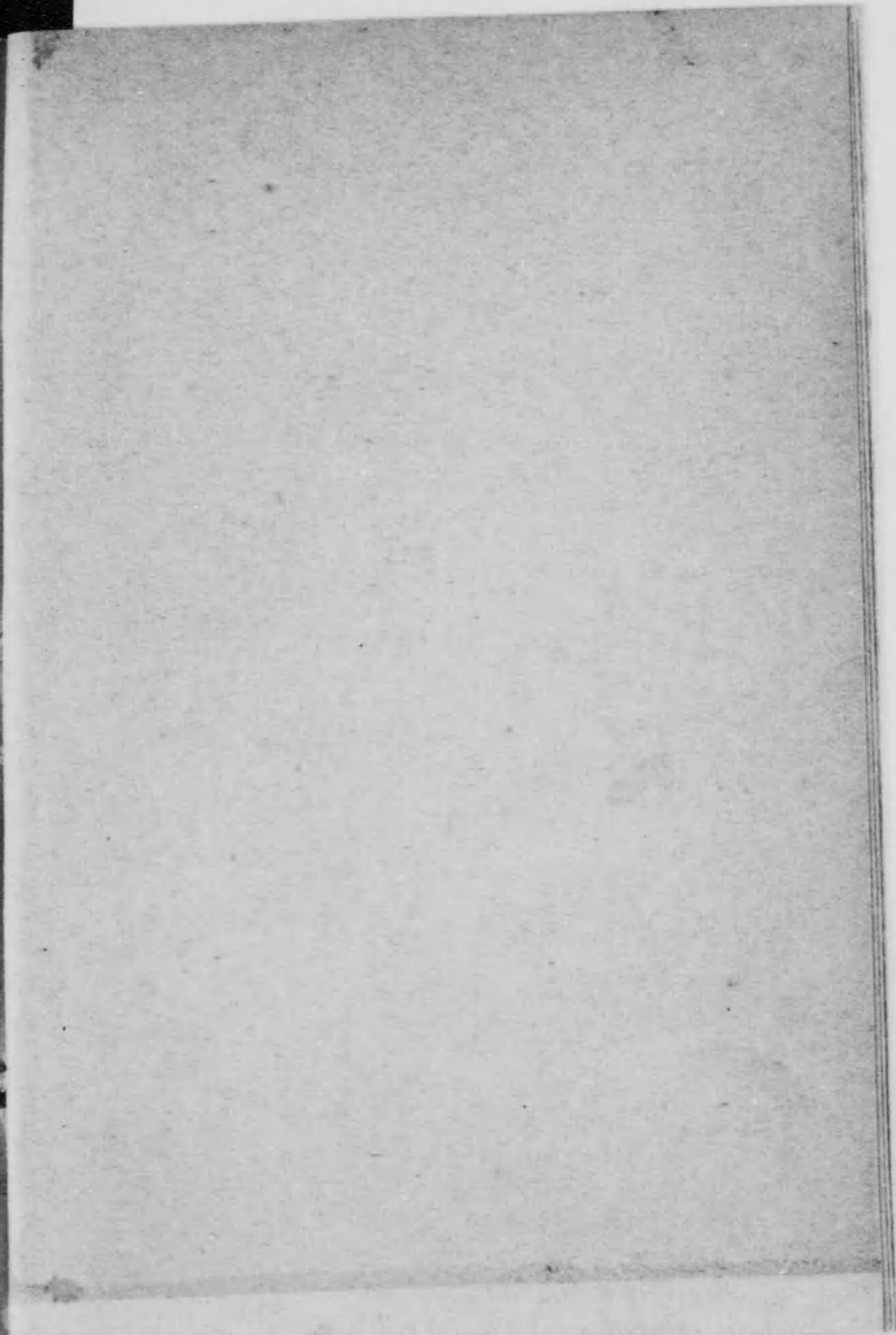
JUKICHI INOUYE

June 14th, 1916.

挿畫目次

スチイヴンソン	(コロタイプ版)	(巻頭)		
スペイドのI	(三色版)	(一)		
惨	死	(三色版) (七三)		
誘	惑	(コロタイプ版) (九七)		
恐ろしき発見	(コロタイプ版)	(一二九)		
二輪馬車の行衛	(コロタイプ版)	(一七八)		
悪	の	家	(コロタイプ版)	(二四五)

自殺俱樂部



乳脂饅頭物語

才藝に長けたるボヘミアのフロリゼル親王が嘗て倫敦に滞在して居たとき、其の行動が如何にも人を引込む様で其の上豪俠豁達で有つたので此の市の總ての階級の人々に敬愛せられて居た。王子は斯くも著名にはなつて居たものゝ世人が王子に就いて知つて居た事柄は極其の一部分に過ぎなかつた。王子は至極平靜な氣象で世の中をば百姓どもが思つて居る位にしか考へて居なかつたけれど、それで居て時には皇族の身分をも打忘れ、冒險的な又常規を逸した遣り口に越味を有たないでもなかつた。氣分の勝れないときとか、倫敦の孰れの劇場にも面

白可笑しい劇がないとか、又は王子に比敵する競争者がないと謂はれて居た銃獵などの野外遊戯が時候の爲め出来ないとかいふときは、何時でも、其の腹心の侍従武官主馬寮の別當ゼラルデン大佐を呼んで夕方散策の用意をする様命じたものだ。大佐は大膽なる、そして寧ろ暴虎馮河の氣質の青年士官で有つたから、何時でも喜んで其の命令を受け、取り急いで用意に着手したものだ。彼は長い問世の辛慘を嘗め世故に通じて居たので變装することに於ては不思議な程巧妙で、音に顔付や、態度のみでなく、音聲や、又思想さへも、何んな階級の人にも、何んな性格の人にも、又何んな國人にも擬することが出来た。斯うして彼は衆人が王子を注意しない様に仕組み、時としては奇妙な集會へ二人で出席する事さへ有つた。流石其の節でも此等の人達の秘密を察

知することは出来なかつた。王子の確乎不拔なる勇氣と、そして大佐の敏捷なる工夫と義侠的熱誠とは多くの危険極まる場合をも無難に遣つて除かした。斯うして二人は時の經つにつれ益々自信を有するに至つた。

一 三月のと或る晩景で有つたが、散策の途次思掛けなくも、酷い寒の襲撃を受けたので、二人はレスタ―四辻の近傍に有つたオイスターバーに馳け込んだ。ゼラルデン大佐は破産に瀕した新聞社員宜しくの服装をし、又顔を塗り附けて居り、王子は何時もの如く偽髯を附け、又二つの大きな附眉毛をもつけて、全く別人に見せかけて居た。實際斯様なものを附けると其の都雅なる風采は忽ち一變して卑賤なる多年櫛風沐雨の辛慘を嘗めた如き風采となり、如何に炯眼の人も之を見分け

することは出来なかつた。斯かる假装の下に指揮官と其の従者とは安心してブランデーと曹達水を酌み交はして居た。折りしもバーは男女の客で一杯になつて居た、其の中に二人も三人も此の探險家に話し掛けはしたけれども、近寄つてしんみりと談り合ふといふことはしなかつた。それも其の筈、其處に居た人々は市井の下等の人、野鄙なる階級の凡俗に過ぎなかつたからだ。それで王子は既に欠伸を出して来て、此の遊覽に倦怠を感じ始めて居た、此の時突然入口の扉が開いて一人の青年が二人の賣子を連れて、バーの中に這入つて来た。賣子は孰れもクリーム饅頭の大きな皿を持つて居たが、這入るや否や彼等は直ちに其の覆を取つた。そして青年は馬鹿丁寧にく〜とお辭儀をして其處に居た人達に此饅頭を無理無性に薦め乍ら歩き廻つて居た。する

と、中には笑つて受けた人も有つたが、又時には、斷然拒絶した人、或は荒々しく押し退けた人も有つた。そして奇態なことには跳ね附けられた場合には、青年は何時でも、其の饅頭を自分で頬張つて何とか面白い註釋を施して居た。

遂に彼は王子フロリゼルに言葉を掛けた、
『もし失禮で御座いますか』と丁寧にお辭儀をして同時に饅頭を母指と食指の間に挟んで『之を一つ召上つて下さる譯には参りますまいか
私は五時から既う二十七も喰べましたので、味はお請合を致しますか
ら……』

『私は頂戴物の善し悪しよりは下さる心の方を先づ聞きたいと思ふのです、是が私の習慣です。』

青年は又お辭儀をして『倍て、其の心は嘲弄の意なので御座います』と答へた。

フロリゼルは『嘲弄?』と繰り返して『そして誰に嘲弄ふ意なのかな。』

すると青年は『私は此處に私の考を講釋しに來たのでは御座いません、たゞ此のクリーム饅頭を配る爲めに參つたので御座います。此の事件には私自身も這入つて居るといふことを申し上げますから、何率それで貴方の名譽は穢されないものと思召して、一つ此の饅頭を召上つて戴きたいもので御座います。左もなくば貴方は第二十八番目の饅頭を私に食へとお強ひになることなるのです。所が私は既ううんと戴いて可厭になつて居るので御座います。』

『お氣の毒様です、それで私は心底から此のデレンマより貴君を救つて上げたいと思ふが、此にたい一箇の條件が有るのです。即ち、私の友人と私が貴君の饅頭を食ふとすれば—吾等は少しも食へたかないのだが—貴君は其の報酬として夕飯を共にして呉れることだと思ふが如何でせう。』

青年は考へて居た様で有つたが聽て斯う言つた、

『私は未だ手に六五十も持つて居ます、ですから、之を悉皆賣つて了ふ迄には未だ五六のバーを駈け廻らなければなりません。之は一寸時間も要ります。それとも若し貴方が御空腹と有らば—』

王子は丁寧なる科で彼の話を遮つて『私達兩人は貴君と一緒に先程貴君が斯様な面白いことをして一夕を過す其の口には先程』

から實は非常に興味を感じて居たのだから。斯う相談の緒が纏つたからは、私に吾等二人を代表して約條を結ばして貰はう。『斯う言つて王子は出来得る丈け品の佳い愛嬌を見せて其の饅頭を頬張り、

『何うも大層お佳しいナ！』

『貴方は饅頭にかけては中々黒人で被在しやると私は思ひます。』

セラルデン大佐も同じく饅頭を頬張つた。そして其のバーに居た人には皆一々當つて見たので既う用もない、それで饅頭屋は更に他のバーに押掛けて行つた。二人の賣子は此の變挺な仕事に慣つて成つて居たと見えて、直ちに其の後に附いて行つた、そして王子と大佐も腕を組み合せ、笑ひ乍ら、殿軍になつて附いて行つた。かゝる次第で行五人のものは更に他の二軒のバーを見舞つたが、何處でも前と少し

も變らない光景を呈した。即ち或る人は此の無頼漢の響應を拒み、或る人は之に應じ、そして拒絶されたとき、青年は何時でも其の饅頭を自分で食つて居た。

第三の酒場を去る時、青年は饅頭を數へて見た。一つの盆に三つ、他の盆に六つ、都合僅か九つ残つて居た。

青年は王子と大佐に向つて言ふには『御免下さい、貴方々の夕飯を後らせまして何とも申譯が御座いません。定めし御空腹で被在しやることとせう、それを辛抱して居て戴いて、誠に恐縮の至りで御座います。處で、私は今日限り、斯様な馬鹿な真似を猶ほ一層馬鹿な遣り方で打切らうとして居るのですから、私に取つては大切な日で御座います。それで私をお助け下さつた皆様方に對して、一つ晴天な振舞を

致したいと思つて居ます。最う長くはお待たせ致しません。實は前餘り澤山食べたので腹は張り裂ける様になつて居ますけれども、私は生命を賭けても、此の未済の條項を片付けて了ひます。」

斯う言つて残りの九つの饅頭を一つ宛口の中に押し込みぐいぐいと飲み込んだ。そして二人の賣子に拾圓金貨二枚を遣つて、

『能く辛抱して呉れて何うも有難かつたね。』

斯う言つて彼は二人に一々挨拶をして暇を遣つた。數抄間彼は今取り出した財布を眺めて立つて居たが、急に笑ひ乍らそれを街道の眞中へ投げ付け、そして是で晚餐に行く準備が出来たと二人に眼配をした。サホに小さい佛蘭西料理屋が有つた。此の家は一時は實際以上の大評判を恣にしたことが有つたのだが、今は既に世人から忘れられ始

めて居た。此の料理屋の三階の奥まつた一室で、三人は大層お味しい夕飯を食べ、三鞭酒の三四瓶も平げ、毒にも薬にもならない浮世嘸をし乍ら吾知らず時を過した。青年は至極快活で辯舌も非常に爽で有つたが、其の突柏子もない笑ひ聲と謂つたら、逆も上流の教育を受けた人とは思へない程で有つた。彼の手はぶる／＼と慄へ、其の聲は喫驚する様に急劇なる音調の變化が有つて、それは殊更出さうとして出して居るものとも思はれなかつた。聽て後附も取り去られ、三人は葉巻を點けたが、其の時王子は青年に斯う言つた—

『少し物好きなお尋だが屹度許して下さるでせうね。貴君の今迄遣られた行動を私は實に愉快に感じたので有つたが、併し合點に行かない節も多かつたので、聊か當惑して居るのです。勿論私だつて要らない

ことを饒舌つて、人から茫然屋と思はれるのは可厭だけれど、是丈は貴君に言つて置かねばならぬ、即ち私の友人も私も秘密を打明けられても充分信用の措ける者だといふことゝ、それから吾等も澤山の秘密を有つて居るのだが、それを絶えず聞かせちやならない人に聞かせて居るといふことゝです。ですから、貴君も目下の秘密を打明けて聞かせて頂きたいものです。そして若し、私の豫想通り貴君の話が愚にも附かないもので有つたなら、何も御遠慮は要らないこととせう。それと謂ふのも吾等とて英國では又とない大馬鹿者なのです。私の名はゴッドオールーいやシオフヒラス、ゴッドオールで私の友人は陸軍小佐アルフレッド、ハンマースミスーまあ彼は那樣な名前で世間に知つて貰ひたいと思つて居るのです。吾等は全く偉い冒険計り探し廻

つて生涯を送つて居るのですから、何んな無鐵砲なことでも一として面白く思はないものはないのです。』

青年が答へて言ふには『私は貴方に惚れ込みました。思はず知らず、釣り込まれて了ひます。そして貴方の御友人小佐殿とやりに對しても一寸とも異存は御座いません。此の方は貴族で有り乍ら假裝して居るゝのだと思ひます。少くとも軍人で被居しやらないことは請合です。』

大佐は斯うお世辭を言はれたので非常に上手に笑つて見せた。すると青年は益乗り氣になつて、

『私が話をする事が出来ないのは一々の理由が有るのです。まあ那樣なことでお話もしないのですが、お見掛け申す所、私の馬鹿話を何

うやら聞きたがつて被在しやる様に見受けます、尤もお話すれば屹度
 失望なすることは無いと思ふのですが。私の名は貴君方がお打明下さ
 つたにも係はらず、申し上げますまい。それから私の年齢は此の話に
 は何の必要も有りません。私は相當な先祖をも有つて居り、そして親
 からは御覽の通り此の大層立派な體軀と一ケ年三千圓の收入とを譲り
 受けました。それは宜しいとして、餘計な此の輕薄なる氣質をもう受
 繼だのだと想像致します。そして之が今迄私の最も悦んで耽つた方面
 なのですから堪りません。私は可成の教育を受けました。それからウ
 アイオリンは平凡な音樂隊の奏樂所で一寸した金を儲けることが出来
 る位には弾けます、併し、何しろ立派なことは出来ません。横笛や佛
 蘭角笛に於ても大禮同様です。あの六つ筒敷い骨牌遊やホイスト戲も

随分稽古致しまして、お蔭で一年に千圓も摺られたことが有りました。
 佛蘭西語も中々遣りまして、今では倫敦でお金が使へる程度に巴里で
 も使へる様になりました。要するに私は男性的嗜好は大抵有つて居る
 積りです。私は有らゆる冒險に手を附けて見まして、下らないことで
 は決闘までも遣りました、それからたつた二ヶ月前私は氣立といひ、
 禮格といひ、自分の嗜好に全く適した一人の若い婦人に逢ひました。
 私は一目見た丈で心臓が溶けて了つたかと思ひました。私ははて是は
 愈運命に到達しそして戀の闇路に進みつゝ有るのだなと勘付きまし
 た。併し翻つて私の財産が幾何残つて居るかと勘定して見ると、僅
 か四千圓にも足らないといふことが分りました。まあよく聽いて下さ
 い。苟も自尊心の有る男が僅か四千圓位で戀が遂げられませうか。

ハナハナアツた

私は断じて那樣なことが出来るものではないと心の中で決めて愈其の婦人を諦め、いつそのこと、思つて其の後段々と平常より浪費の率を高めて、遂に今朝残り八百圓となつたのです。此の八百圓を二分して一半は特別の用途に充て他の一半を今夜中に撒散して了はねばならぬのです。私は大層面白い日を過しました、そして辱なくも貴方々とお知合に成る機会を與へて呉れた今晚の饅頭配りの遊の外茶番を随分演りました。それも先刻お話致した通り今迄馬鹿なこと計り致して参りましたのですからむしろずつと思ひ切つた馬鹿なことをして打ち止めたいと決心したからです。そして先刻町中へ投げました財布の中には實は例の四百圓が這入つて居たのです。此處までお話を致しますと、本當に一切をお打明け致したことになりますが、何うです偉い馬

鹿者でせう。併しそれにしては終始一貫した理由の解つた馬鹿者です。ですから別に啜り泣をする弱蟲でも又思ひ切りの悪い臆病者でもないといふこと丈は信じて戴きたいのです。』

此等の話の全體の調子から推測して見ると青年は自分自身に就き酷く愛想をつかして居たといふことは明瞭で有つた。是を聞いて居た二人は此の青年の戀物語は彼が平氣で語つて居たよりもつと切ないもので、その爲め屹度自殺を企て、居るのだといふことに勘附いたので有つた。斯うして観ると、饅頭配りの喜劇も大なる心中の悲劇を語つて居るのだといふことが解り始めて來た。

ゼラルデンは王子フロリゼルに一瞥を與へ乍ら、開口一番言ひ出した『まあ是は何んと奇態なことでは御座らぬか、斯うして私達三人が

倫敦の様な廣い所でほんに一寸したこと相會し、然かも皆殆んど同じ様な境遇に居るとは—」

『え、？』と青年は叫んで『貴方々も同じく破産なすつてお出になるのですか。此の晩餐は矢張り私のクリーム饅頭の様なものですか。悪魔の奴が私達三人を最後の酒宴にと集めたのでせうか。』

すると王子フロリゼルは答へて『悪魔は時には大層氣の利いたこともするものです、そして私は此の符節を合する如き三人の境遇の一致といふことに酷く感動させられたに依つて、たゞ相違して居る所持金の不同といふことを無い様にする爲め、貴君のあの最後のクリーム饅頭の思ひ切つた遣り方をお手本にしませう。』

斯う言つて王子は墓口を取り出して其の中から銀行手形の小さな束

を掴み出した。

『御覽、私は一文無しになるには今から一週間も要るのです、併し今貴君に追ひ附いて相並んで決勝線に入りたいと思ふて居ます。』王子は猶ほも續けて、『之で』と言つて一枚の銀行手形を卓上に置いて『此の家の勘定は充分でせう。残りの奴は—』

と次の句を言ふ間も有らばこそ、其の残りの銀行手形を暖爐の中に投げ込んだ。するとポーと燃え上つたかと思ふと直ちに煙となつて煙突の中に消え失せた。

青年は王子の腕を掴へて是を引留め様としたが、食卓が間に有つたので遂に間に合はなかつた。

『失敗つた、貴方は皆焼いて了つてはならなかつたのでした！ 四百

圓丈は是非別にして置く可きでした。」

青年の詞を受けて王子は「四百圓！まあ、それは一體何うした譯です、四百圓とは？」

「何故八百圓でないのです？。あの束の中に確かに一千圓は有つた筈です。」と大佐は叫んだ。

「あの方がお入用で有つたのは、たゞ四百圓です。それが無いと這入れないのです。規則は中々嚴重です。一人毎に四百圓。死ぬるにも金がなくてはならないといふのは何と厭はしい此の世でせう！」と青年は稍鬱いで言つた。

王子と大佐は互に顔を見合はせた。聽て大佐は、

「今の貴君のお話は一向に不得要領です、一體何うしたといふのです

か。私は未だ可なり金の這入つて居る財布を持つて居ります。そしてゴッドオールのためなら何時でも金は出して遣るのです。併し、譯も無く出せないから、何の爲めに金が要るのか先づ御説明を願ひ度いものです。」

此の言葉に青年は稍氣附いた所が有つたらしかつたが、猶ほも不安の様子で暫らく兩人の顔を見渡し乍ら大層顔を赤らめて来て、

「貴方々は私を騙しては居られないでせうね。貴方々は眞箇に私の様に破産して被在しやるのですか。」と尋ねた。

「私は眞箇に左様です。」と大佐は答へた。すると王子も、

「そして私は貴君に今證據を見せたではないですか。破産した者でなくて誰が銀行手形を火の中へ焼べるものですか。論より證據事實が明

らかに證明して居るでせう。』

『左様です—破産者かそれとも大金満家かで被在しやるのでせう。』と青年は稍疑念を挿んで答へた。

『それは餘りです。お止しなさい。私は破産者と明白に話をしたので。そして一旦私の言つたことが何時迄も信用して貰はれないなど。斯様なことは之が始めていす。』と王子は言つた。

『破産と仰有しやるのですか。貴方は私の様に破産なすつて被居しやるのですか。貴方は思ひ切つた不羈放從の生活を送つた後、遂に残りの最う一つのことまで遣つて見ようとお思ひになる様になられたのですか。貴方は』—と青年は聲を下げて猶ほも續け、『今貴方は最後の道樂に耽らうとしてお出になりますか。貴方は馬鹿な限りを盡した其

の結果を何うしても間違かうのない一番容易い遣り方で打切らうとして被居しやいますのですか。貴君は人間の爲めに開いて居るあの一つの扉に依り、良心といふ大目附の目を晦まして此の世を脱け出さうとして居られるのですか。』

突然彼は話を止めて殊更笑顔を作り、盃の酒を飲み乾し乍ら諸君方の健康を祝します、御機嫌宜敷う、左様なら、諸君。』と叫んだ。

青年が立ち上らうとして居たとき、ゼラルヂン大佐は其の腕を掴んで、

『貴君は吾等を信用して居られないのだ。それは貴君が善くない。貴君のお尋ねは一切承知致しました。憚り乍ら私も卑怯未練の者ではないです。そして今言つたことには決して間違は有りません。吾等も貴

君と同様に世の中は充分経験し盡したので既う嫌になり、死なうと決心して居るのです。早かれ後かれ、一人で死ぬるか、一緒に死ぬるか、兎に角死神が、何處かに轉がつて居れば髭なりと引張つて遣らうと探し廻はつて居るのです。今晚貴君にお目にかゝつて貴君の立場は吾等よりも一層切迫して居ることを知つたからは、今晚斷行しませう——今直ちに——それともお望みなら三人一緒に實行しようぢや有りませんか。一文なしの三人連。」と聲を張り上げ「ハ、閻魔様の法庭に手に手を執つて行きませう。そして地獄でお互に力になり合ひませうよね！」

流石ゼラルデンで、斯かるときには此の上ない適役、所作といひ、音調といひびつたりと旨く其の場に當て符めたので、王子は聊か當惑の體で疑問の曇を眉間に見せて大佐を食卓越しに眺めた。青年の頬は

再び赤黒くなり、眼は光の閃を放つて輝き渡つて來た。

聽て青年は大層嬉し相になつて辯舌も爽やかに。「諸君は實に我黨の士だ自殺談判締結の爲め握手を致しませう！」彼の手は冷たくて濕つて居た。「諸君は何んな仲間と一緒になるのか御存じないでせう！又諸君が私の饅頭を喰つて下さつたのは諸君に取つては實に此の上ない好機會で有つた事にもお氣附ないでせう——私は或る團體の一員です。私は「死」の勝手口を知つて居ます。私は死の仕魔の一人です。ですから、儀式張らず、それとて名譽を毀つこともなく、永劫の彼世へ御案内致すことが出来るものです。」

二人は其の意味を今一層明白に説明して呉れる様に青年に要求した。

『貴君方の間で八百圓の金を醸出することが出来ますか。』と青年は訊いた。

ゼラルヂンは態とらしく財布を開けて見て、然りと告げた。

『それはお仕合です。』と呼んで『自殺倶楽部入會金は一人前四百圓です。』

『自殺倶楽部！まあ、それは一體何です。』と王子は訊いた。すると青年は『まあ、お聞き下さい、今日は實に便利な世の中では有りませんか。そして今私は其の最も完全な域に達した状態をお話ししようと謂ふのです。先づ早い話が種々違つた所に色々な事件が起るので鐵道が發明せられました。鐵道が有ると可厭でも應でもお互を遠方に分離することになります。だから電信といふものが造られて遠方からでも迅速

に通信することが出来る様になりました。又旅館にしても數百の階段を登る勞力を除く爲め昇降器が出来ました。斯うなると此の世は一種の舞臺の様なもので、たゞ面白くと思つて居る。『お待たせ、化役を演つて居る舞臺の様なものと思はざつて其の愉快でなくなつたときに對して居たのです。即ち此の人生のことです。之は又絶對に上げてました通り死の音が缺けて居たのは爲めに設立せられた方や、私のみで有

はなりません。
から可厭になへ
をようしな

世の人か

の境遇に畏縮して下

なのです。私は頭に拳銃

といふのも私自身よりは強い

す。そして私は人生には既う可厭々々

此の世と縁切りをする丈の力を有つて居ない

か、又死後悪評を受けないで錯雑紛糾したる此の人生か、

する人々に對して自殺俱樂部は設立せられたのです。何て此の俱

樂部は管理されて来たかとか、何んな沿革を有して居るとか、他國に於ける其の分店は如何などいふことについては私自身ですら存じません。そして其の組織に就いて私の承知して居ることは他言を禁じられて居るので、今夫を貴方々にお知らせする自由を有しません。たゞ是丈のことは貴方々にお話し致しませう、即ち、若し貴君方が本當に此の世がお可厭になられたのでしたら、私は今晚直ちに或る集會に御案内致しませう。そして若し今晚出来なければ、少くとも一週間以内には屹度此の現世に生存へるといふ苦痛から容易くお救はれなさるでせう。(懷中時計を見て)今は既う十一時です。後くとも十一時半迄には此處を去らなければなりません。ですから私が今申し上げたことを御熟考なさるのに未だ三十分間有ります。中々眞面目な相談で、クリ

「ム饅頭の比では有りません」と彼は笑つて『そして私は饅頭よりももつと玩味する價値の有るものと思ひます。』と附け加へた。

ゼラルチン大佐は『確かにずつと眞面目なことです、ですから友人ゴッドオール君と内密の相談をしたいと思ひますに依つて、五分間丈猶豫して下さい。』と言つた。

『それは當然のことです。若し何なら私は別室に控へて居りませう。』と青年は答へた。

『左様願はれると誠に結構です。』と大佐は言つた。

二人限りになつたとき王子フロリゼルは『此の事は別に内相談の必要もないではないか。ゼラルチン、お前は怖氣附いて居る様だが、併し私の心は至極平穩で既に決心する處が有る。即ち此の事を終焉ま

で見届けないでは置かない積りだぞ。』

大佐は顔色蒼然となつて『殿下、貴方のお體軀はたゞ貴方の御友人に對する計りでなく人民の利害に大切なる關係を有して居らるゝものなることを御考察願ひ度いので御座います。此の狂氣は『今夜出來なければ』と申しましたが、若し今夜或る取返しに附かない一大凶變が殿下の御身上に出態したと御想像なさいまし、何うで御座いませう、私の失望は申すに及ばず、ボヘミヤといふ一大國民の憂慮と不幸は何んなで御座いませう?』

王子は最も落附いた調子で『此の事を終焉まで見届けないでは置かない。』と繰り返し『そしてゼラルチン大佐よ、何率紳士として例の誓言を記憶し且つ尊重して貰いたものだ。何んな場合でも、私の特別の

許可のない限り、私が外國で假装の下に微行して居るのだといふことを思ひ浮べたり、又は夫を口外に洩らす様なことが有つてはならぬ。此の命令は今再び繰返へして言つて置くよ。さあ、』と王子は附け加へて『勘定を持つて来る様に言つて呉れないか。』と言つた。

ゼラルデン大佐な恭順の意を表して頭を下げた、併し彼がクリーム饅頭の青年を呼び入れ、給仕に彼の命令を傳へたときは、彼の顔色は蒼白くなつて來た。王子は何等意に介する處なく、素敵な上機嫌で青年自殺者にバレロアヤル座の喜劇を話して聞かせた。そして大佐が目配で頻りに哀訴するのを目立たぬ様にして避け、平常よりも落付拂つて今一本の葉巻煙草を取り出した。實に三人の内泰然たる態度で居たのはたゞ王子一人で有つた。

勘定が濟んだ。王子は其の手形に對する釣錢悉皆を給仕に遣つたが、給仕は目を丸くして王子を見て居た。聽て三人は四輪馬車に乗つて出かけ、馬車は餘り程遠からぬ稍小暗い路次の入口の處で停つた。此處で一行は車から下りた。

ゼラルデンが馬車賃を拂つた後で、青年は王子の方に向き次の如く話した、

『ゴッドオール様齷齪と此の浮世に生長へようとせらるならば、今なら未だ充分間に合ひます。ハンマースミス少佐殿にも御同様です。今一步踏み込まんとするに當つて、よく御熟考なさい。そして若し内心お可厭で有るなら、兎に角此處が一生の岐れ道です。』

すると王子は『さつさと案内し給へ。私は一度言つて置いて尻込す

る様な男ではないのです。』とキツパリと言つた。

案内者は『御冷静で被在しやるのを見て誠に結構だと思ひます。私は是迄幾人か此處へ連れて來たのですが、此の一生の危急存亡の際に貴君の様に落附いて被在しやる方を見たことが有りません。數人の私の友人は既に私に先立つて往生を遂げましたのです、そして私も間もなく逝かねばなりません。いや何うも餘計なことを申し上げました。斯様な話は貴君に面白くも何ともないで御座いませう。今暫くの間御待ち下さい、御入會の豫約を致して参りますから。』

斯う言つて青年は二人の者に向つて手を振り、角を廻つて路次に入り、一つの入口から這入つて見えなくなつた。

『私共は此迄馬鹿なことも随分澤山致しましたが、斯様なに狂氣じみ

た又危険極まることは経験したことが御座いませぬ。』とゼラルヂン大佐は言つた。

『私も完く左様思ふよ。』と王子は答へた。

大佐は猶ほも言葉を續けて『吾等は未だ去就を決する猶豫を有つて居るので御座います。でお願いで御座いますが今此の機會を利用してお手をお引きなさつて下さいませんか。此の度の事件は前途誠に曖昧糺糊として、又頗る重大なことになるかも知れません。で御座いますから、平生は兎に角今晚は、殿下が内密ではお許し下さいました諫言を平常よりも一層不躰に申し上げても宜しいことだと存じますので御座います。』

『ゼラルヂン大佐は怖氣て居るのだと思ふが何うだ。』と口から葉巻を

取つて、大佐の顔を強く打眺め乍ら王子は訊いた。

大佐は意氣昂然と『私の心配は決して自分の身可愛さに申すのでは御座いません。それ丈は何卒御安心下さいませ。』と答へた。

王子は至極平靜なる態度で『私の爲めに那樣な言ふだらうとは思つて居た。併し私は吾等の地位が違つて居るといふことは、約束して置いた通り、考へて貰ひたくはない。』と答へて、それから『まあよし—まあよし』とゼラルデンがお詫びを爲ようとして居たのを制して『今言つたことは許して遣る』

そして王子は平然として煙草を吹かせ乍ら欄干に依り掛つて、青年が歸つて来るのを待つて居た。臆て歸つて来た青年を見て、

『やあ—最う入會は許可になつたかね?』

『何卒か此方へお出で下さい。會長は内房で貴君方にお目に掛ると言つて居ます。そして御參考迄に申し上げて置きますが、御返事は何卒包み隠しなく仰有しやつて下さいまし。私は貴方々の保證人に成りましたが此の俱樂部では入會許可に先つて色々綿密な査問を致すことになつて居ります。それといふのも一會員の無分別から俱樂部全體の永久的解散を惹起さないとも限らぬのですからね』

王子とゼラルデンは一寸相寄つて相談して『此の點に就いて證人になつて呉れ。』と一人が言へば『彼の點に就いては證人になつて下さい。』と他が言つて、二人が不斷遣り來つてお手のものになつて居た役割を少しの滞りなく取り極め、意見は束の間に一致して了つた。そして案内者に従つて將に會長に面會せんとするので有つた。

目的の室に達するには何も大した障碍物もなかつた。外側の扉は、おつ開いて有つて、内房の扉は少し計り開いて居た、そして青年は其の小さいが併し大層天井の高い室に二人を残して置いて行つた。そして行くときに點頭いて『會長が直ちに見えるでせう。』と言つた。

其の内房の一方を成して居た折戸から人の聲が洩れて來た。そして時々三鞭酒を抜くコルクの音が阿々大笑する笑聲と共に會話の音聲の間々に聞えて居た。たゞ一つの高い窓からはテムズ河と其の河縁とが見えて居た。そして其の附近の燈火の配列の具合から考へて、二人は此處はチャーリングクロス停車場より遠くない所だと思つた。室内道具は極めて少なく、机椅子などの覆は擦れ切れて居た。動かさるるものとしては丸い机の眞中に一つの呼鈴が有るのみで有つたが、周

圍の壁に多くの帽子や外套が掛つて居たので可成の人が來て居たことが分つた。

『まあ變挺な家で御座いますね。』とゼラルデンが言つた。

『だから見に來たのだ。若し此の屋敷内に生きた悪魔が居るとすれば、それこそ面白いぢやないか。』と王子は答へた。

其の時折扉は丁度一人一人通れる位開いた。そして同時に大勢の話聲諸共に恐ろし相な自殺俱樂部の會長が這入つて來た。會長といふのは五十か五十二三位の年配で風采と謂つたら粗雑なる頬髭を生やかし、頭は禿げて居り、上目蓋の被ぶさつた灰色の眼を有つた、ブラリ／＼と大股に歩く人で有つた。そして其の眼光は時々炯々として人を射るが如き鋭い光を放つて居た。彼は大きな葉巻を銜へ、むぐ／＼と口の中

で動かし乍ら新來の客をじろくくと鋭どく而かも冷靜に見て居た。彼は色の薄い毛織物を着、胸の處を開け、條の入つた、襦衣領子を見せ、腕には一冊の明詳書を挿んで居た。

『善く入らつしやいました。何かお話がお有りなさいませう相で。』と扉を閉めて終つた時會長は言つた。

『吾等は自殺俱樂部に入會致したので御座います。』と大佐は答へた。

會長は口に銜へて居た葉巻を動かして、

『それは一體何のことです。』と出抜けに言つた。

『御免下さい、貴方こそ其の點に就いて御教へ下さる最も適當なお方だと存じましたので。』と大佐は答へた。

『私が？自殺俱樂部？まあ、自殺俱樂部なんて實に馬鹿氣たものですな、斯様な下らないことは話しますまい。私は眞面目で那樣なことをいふ人が有れば、決して許しません。まあ、酒でも飲んだ人の言ひ相なことすな。併しそれはそれとして兎に角斯様なことは話しますまい。』と會長は叫んだ。

『俱樂部の名前なんか何うでも可いのです、此の先の室に幾人かの御仲間が居らるゝ様ですが、吾等は其の仲間入をさして頂きたいと言ふのです。』と大佐は言つた。

『失禮ですが貴方は何か考違をして入らしやるのでせう。此の家は唯私一個の私宅です。ですから、直ちに御退去を願ひます。』と會長は無愛想に答へた。

王子は此の對話中椅子に坐つて黙つて居たが、大佐が『那樣な尻込しないで貴方も何か仰有しやい。』と言はん計りに彼を机越にじろじろ見たので、王子は葉巻を口から取つて斯う言つた――

『私は貴方の御友人に誘はれて此處に參つたのです。何の目的で推參致したのか其の方からお話が有つた筈です。たゞ御承知置を願ひたいのは、私の様な境遇に居るものは自分で自分を抑へる力はないといふことです。ですから餘りなことをせられて黙つてはよう居ません。私は平常無事平穩を好む方です。だから若し貴方が御承知で居らしやる事柄をお話し下さらば、夫で宜いのですけれど、萬一左様でないといすれば、後々私を此の控室にお入れになつたことを非常に後悔なさることもがお有りませうよ。』

會長は大聲で笑つた。

『左様仰有しやる可きです。貴方は實に男らしい方で被在しやいます。貴方は私を動かす道を御存じです。それで何でも好きなことを私と共に成さることがお出來です。』と會長は言つて、ゼラルチンの方に向き『貴方は暫時別室へ行つて居て下さらないでせうか。私は先づ此の方と話をしなければなりません、且つ俱樂部の或る規則は秘密の中に履行せられなくてはなりませんから。』と言つた。

斯う言つて小さい別室の扉を開けて其の中へ大佐を閉め込んだ。そして二人丈になつた時會長はフロリゼルに、

『私は貴方の爲人は信じて居ます。併し御友人の方は大丈夫ですか。』と訊いた。

『彼も斯うなる迄には餘程深い且つ有力な原因が有るのでせうけれども、私が自分自身を保證して居る程度に保證する譯には参りません。併し、此の部屋に連れて来て一絡にお尋ねになつたからとて、別に御心配は御座いしません。彼の男も此の執拗い人間の世の中には既う可厭々々になつて居るのです。其の上先達骨牌をして居たときに胡麻化したと言ふので仲間から追ひ出されたのでした。』とフロリゼルは答へた。

『それは善い理由です、いやそれと同じ理由で此處に來た人も幾らか有ります。では彼の方も大丈夫と思ひます。して貴方は、失禮ですが、兵隊にお出になつたことが有りますか。』と會長は言つた。

『参りました。併し餘り横着なので迎も勤まらず疾つくに止してしましました。』

『人生に厭いて來た理由は如何です?』

『私が考へる處では兵隊が可厭になつたのと同じで矢張純粹の横着からだと思つて居ります。』

會長は屹驚した。『まさか、それ位のことではないでせう、屹度夫以上の理由がお有りの筈です。』

『それに私は最う金が一文もないのです。是も亦確かに一つの大きな苦痛です。金がないから横着が出來ないといふことは、のつびきならぬ處まで私を押し詰めたのです。』

會長は暫らく口に銜へて居た葉巻を動かして此の奇妙な新入會者を真直に見詰めて居たけれども、王子は其のじろく見られるのを、別に根くもならないで、平氣で耐へて居た。

『若し私が経験の少ない人間でしたら、貴方を追ひ出すのです。併し私は世間を知り抜いて居ります。それで自殺の理由はよし詰まらないことに有るとしても、止められない様な強い力となるものだといふことも存じて居ます。そして私は其の人が好きになると一丁度今貴方を好いて居る様に一規則を曲げても入會させて上げたいと思ふ位なのです。』

斯くて王子と大佐は交互に長い綿密な審査を受けた。王子は何時でも獨りで訊かれて居たが、ゼラルデンの時は王子は必ず列席させられて居た。是は會長が、大佐を厳しく訊問し乍ら王子の顔色を觀て参考に資せんとした爲で有つた。處が其の結果は満足で有つたので、會長は二人に就いて二三の詳細なる事項を記録した後、誓約書式を取り出す。

して之に誓はしめた。此の證書に載つて居た條項は誓約者に對して寔に嚴重なるもので、又絶對の受働的從順といふことを要求して居た。那樣な畏ろしい誓約書を手渡した人は名譽は言ふに及ばず、宗教上の慰安も何も既う得ることは出来ないの有る。フロリゼルは證書に自署したが、其の時彼は滿更震へて居ないでもなかつた。大佐も非常に憂鬱な様子をして王子の例に倣ひ自署した。そして會長は入會金を納した以上別段のこともしないで、二人を自殺俱樂部の喫煙室に案内した。

自殺俱樂部の喫煙室は隣室なる前記内房と高さの點に於ては同じで有つたが、廣さはずつと廣く天井から床まで檜の腰板に眞似た紙で貼つて有つた。そして大勢の人々は熾んに燃えて居た氣持のよい圍爐裏

の火と、多くの瓦斯燈口の灯とで照らされて居た。王子と其の従者が遣つて來たので總員丁度十八人となつた。多くの人は煙草を燻したり、三鞭酒を飲んだり、狂ふが如き勸喜が満ちくで居たが、時々急な又何だか物凄いな様な杜絶が有つた。

『會員は是で全體ですか』と王子が訊いた。

『まあ此の位な處ですな』と會長は言つた。『時に若し、お金をお持でしたら、それで三鞭酒を奢ることになつて居ます。何うも酒でないと景氣が取立たぬものでしてね。又一つには私自身の役得にもなるのです、ハ、。』

『ハンマースミス三鞭酒のことはお前に一任するよ』とフロリゼルは言つた。

斯う言つて王子は行つて客人に挨拶をし始めた。嘗て上流社會で主人役を務めることには腕を鍛へて居たので、其の接待振りで逢ふ人毎に之を魅して居た。彼の言葉には人の心を得る様な又威壓する様な所が有つた。そして其の非常に冷靜なる態度は此の半狂氣の會合中に有つて一種の異彩を放つて居た。一人々々段々と話をして行く間、彼は己を空うして人々の話を傾聴して居たから、程なく會員は大體何んな種類の人々で有るかといふことが分つて來た。斯様な隠れ場所に來る人は何處でも共通で有るが、彼等を通じて特に目立つ點は皆大抵青春今將に酣なる人々計りで、顔付には叡智と感能の鋭さが現はれては居たが、氣力の有りさうな見込もなく、又成功に必要な特性も缺けて居たといふことで有つた。三十を越した人は極めて少かつたが、廿

にもならない人々も無いではなかつた。彼等は机に凭りかゝり上體を動かして乍ら立つて居た。時々彼等は大層忙し相に喫煙するかと思へば、時には葉巻の火が消えたのも知らないといふ風で有つた。又或る者はのべつに饒舌つて居たが其の他の人々の會話は明かに神經を極端に緊張した結果で正氣の處も要領を得た處も同様になかつた。三鞭酒の新しい瓶が開けられたときは皆喜んで目に見えて活氣附いて來た、椅子に腰を掛けて居た人はたつた二人で——其の中の一人は窓の處の壁龕に在つた椅子に座つて頭を垂れ、手を洋袴の衣囊に深く突き込み、顔は蒼ざめ、發汗して居たので全身濕つぱくなつて、一言も發せず、心身共に破壊した人で有つた——他の一人は煙筒の側に在つた後のない長椅子に腰を掛け、他の者とは著しく違つて居たので一際人目を惹いて

居た。彼は多分四十を幾つか越して居たので有つたらうが、未だ十も老けて見えた。フロリゼルは嘗て斯様な生來恐ろし相な人、又病氣と放蕩三昧を盡した結果斯様な破壊に陥つた人を見たことがないと思つた。彼は骨と皮計りで體軀の一部分は麻痺して居た。そして眼鏡といつたら非常に強度のものを掛けて居たから、爲に眼球が恐しく擴大され、形は歪んで見えて居た。けれども王子と會長とを除いては此の男一人のみが普通の人間らしい平靜なる氣持を有つて居たので有つた。

俱樂部會員の動作には上品な處は殆んどなかつた。或るものは恥づべき行動をして、その結果死に隱家を求める位に落魄れたのだが、彼が却つてそれを矜り顔に話しても、是を聞いて居るものは別に彼を非

難もしなかつた。斯ういふ風で皆の間に道徳的判斷はしないといふ黙
 喫が有つた。そして俱樂部の扉をくゞつたものは既に他界の人で此の
 世の憂き苦勢から全く免れて居たものゝ如くで有つた。彼等はお互に
 酒を酌み交はして健康を祝し、又過去に於ける著名の自殺者の爲めに
 祝盃を擧げ、死に就いての各々の意見を闘はし、段々新らしき見解を
 施して行つた。或る者は死はたゞ暗黒と機能の中止に過ぎないと主張
 し、他の者は死んだ其の夜彼等は遙か天涯に攀ぢ昇り過去の偉人と談
 笑することが出来るので有ると希望満面に充ちて居た。斯かる光景で
 議論囂々として殆んど盡くる所を知らなかつた。

『自殺者の典型トレンク男爵の永久の紀念の爲め祝盃を擧げよう！彼
 は此の人の世といふ小さい庵から奥津城といふ猶ほ一層小さい庵に這

入つたのは畢竟するに再び自由を享有せんが爲めで有つたのだ。』と一
 人が言ふと、

『自分に言はせると、自分は此の世の事物に耳目を背ける爲め目を縛
 る縋帯と耳に詰める生綿より他のものを欲しない。たゞ憾むらくは此
 の世では其の生綿が充分なのだ。』と他のものが言ふ。

第三の人は色々なる未來の神秘的なる事柄を知りたがつて居たし、
 そして第四の人は若し彼がダーウケンの説を信ずる様に仕向けられな
 かつたとすれば決して此の俱樂部に入會することはなかつたのだと頻
 りに進化論を引證し、

『吾等の先祖が猿だといふことは私には實に堪へられないことだ』と
 此の奇抜なる自殺論者は言つて居た。

王子は會員の行動とか會話とかを見たり聞いたりして全く失望して
獨り呟いた、

「何も斯様な馬鹿騒ぎをしなくても宜いことだと思ふ。一旦自殺をし
ようと決心した以上は紳士らしくそれを遂行したらよいではないか。
此の場合此の騒ぎや此の大袈裟な話は實に不似合のことだ。」

其の間ゼラルチン大佐は非常なる心配に襲はれて居た。彼には此の
俱樂部全體の様子も又俱樂部の規則も猶ほよく了解つて居なかつたの
で、誰れか之を説明して呉れる人はないかと頻りに室中を見廻はすの
で有つたが、其の内彼は例の強度の眼鏡を掛けた麻痺先生に目を付け
た。此の人は他の人とは違つて非常に靜肅にして居たので大佐は、大
層忙がし相に部屋を出たり這入つたりして居た會長に此の長椅子に座

つて居る方に紹介をして呉れと依頼した。

會長は俱樂部の内では那樣な形式張つたことは一切不必要で有るこ
とを説明した。併し、取敢えずハンマースミス君を眼鏡のマルサス君
に紹介した。

マルサス君は不思議相に大佐を凝視して居たが、應て招じて彼の右側
に坐らしめた。

「貴方は新會員で被在しやつきますのですか、そして何かお聞きにな
りたいのですか。まあよろこお出になりました。私か此の面白い俱
樂部に参りましたから既う二年になります。」とマルサス君は言つた。

是を聞いた大佐は先づ「蘇生の思をなした。若しマルサス君が此
處に二年間も來たといふなら、王子が一晩位被在したからとて、別段

危ないことも有るまいと思つたからで有つた。併し、それにも拘らずセラルヂンは動からず喫驚して、是は何うも不思議なことが有り相だ。なま頻りに疑ひ始める様になつて來た。

『何ですつて？ 二年間！ 私は併し——まあ貴君は冗談を言つて被在しやるのでせう。』と彼は言つた。

『決して冗談なんかでは御座いませぬ。私の場合は又特別なのです。本當を云ふと私は些とも自殺者ではなくてまあ言はゞ名譽會員ですな。此處に來ること滅多にないので二箇月間に二度も有りますまい。私の病身勝なること、會長の好意とで便宜上等の特權を與へられる様になつたのです。併し夫に對しては私は會費を餘計に出して居ますのです。兎も角現在の儘でも私の幸運は大したものですよ。』とマルサス

君は答へた。

『恐れ入りますが、今少しお打明を願ひいたしたいものです。何しろ御覽の通り新參者で未だ此の俱樂部の規則に善く通じて居ないのですから。』と大佐は言つた。

『普通會員で貴君の様に早く死にたいと急いで居る人は運が向いて來る迄幾度となく此處に來るのです。一文もない人でも會長に食事又貸間を御依頼することが出來ます。食事は可成のもので清潔ですが、勿論贅澤では有りませぬ。又會費の少ない——左様言つても差支ないと思ひますが——のを見ても贅澤に出來よう筈はないのです。それから、會長の話も中々面白いものです。』と麻痺先生は答へた。

『成程！ 併し私には會長は餘り面白い人とも思はれませんでした。』と

ゼラルヂンは答へた。

『あゝ、貴君はまだ會長の爲人を御存じないのです。可笑しい人！』

何を言つて被在しやるのです？ まあ随分ですね！ 會長は人生を酸

い程知つて居られます、そして是は内證ですが屹度耶蘇教國に於ける

最も墮落した無賴漢の一人ですな』とマルサス君は言つた。

『そして會長も亦貴君の様に永久無難な終身會員ですか—御氣に觸は

るかも知れませんが。』とゼラルヂンは訊いた。

『左様です、會長の無難といふのは私のとは違つた意味に於てゝす。

私は特別の恩惠で生き長らへさして貰つて居るのですが、何時かは遂

に逝かねばなりません。會長は今骨牌をとられません。たゞ皆の爲

にそれを切つたり、配つたり、又は必要なる準備をせられます。ハン

マースミス君、會長はそれは大層發明な方ですよ。三年間彼方は倫敦で

有益な且つ—斯う附加へて言つても可いと思ひますが—巧妙な職業を

お遣りになつたのです。そして嫌疑と言つたら爪の垢程も掛けられな

いの不すからね。此の人には神様が乗り移つて居られるのだと思はれ

ます。貴君は屹度六箇月以前に、藥種店で一人の紳士が圖らずも毒殺

せられた、あの評判の話を御存じでせう。あれはほんの朝飯前でもた

く巧みな考案が幾らも有るのです。併し乍ら、まあ何と簡單で而か

も安全な旨い遣り方でせうと！』マルサス君は顔に驚嘆の色を浮べた。

『何ですつて？ 彼の不運な紳士は—矢張り犠牲』と言ひかけたがハ

ツと氣が附いたので『此の倶樂部の會員でしたか』と言つた。

大佐は斯う言つたと同時に、不圖、此のマルサス君の話振りは少しも

死を好んで居る人の様ではないといふことに氣が附いた。それで急に附加へて言つた、

『併し私は先刻からの話がよく解らないのです。貴君は會長が骨牌を切つたり配つたりするのだとお話になりましたが、それは全體何の爲めなのでせう。そして貴君は會員で有り乍ら何方かといへば死ぬることはお可厭の様に見受けますので私は何の爲めに此處にお出になつたのか夫も解らないのです。』

『貴君は了解しないと仰有しやいましたが、それが本當です。』とマルサス君は前よりも元氣附いて、『まあ、貴君、此の俱樂部は飲んだくれの集合場です。若し私の弱い身體でも今少し興奮に堪へられるのでしたらまだ頻繁に此處へ來るべきなのです。私の健康状態では餘りに

酒——まあ私の今生の最後の娛樂なのですが——に耽らない様にするには長い間の不健康に依り並びに注意深い養生法に依つて得た確たる義務の觀念が要るのです。私は娛樂といふ娛樂は皆試みて見ました。』と彼は手をゼラルデンの腕の上に置いて續けて言つた。そして皆面自いだらうと思ひ込んで遣つて見たのでしたが、其の實私は誓つて申し上げますが孰れも誇張大せられたものばかりでこれぞといふものは一つも御座いませんでした。いや人々は戀愛を弄んで居ます。處が私は戀愛は強い熱情ではないと思ひます。恐怖の方が却つて眞の熱情です。ですから、若し人生に於て最も強烈なる樂を味はんとする人は此の恐怖を弄ぶべきです。私の様におんなさい、私を手本になさいまし。』

とくつく、笑つて附け加へ『私は又此の恐怖病患者なのです！』

ゼラルヂンは此の悲むべき薄命者に對して嫌忌の念を禁ずるを得なかつた。併し彼は努めて平氣を裝つて猶ほ質問を續けた—

『何うして此の會員のあの興奮を旨く鹽梅して續けて行くのです？ 又會員が不安の念を懐くに至る根本は何處に在るのです。』

『此處では死ぬ可き人や、又此の俱樂部の手先となり、又同時に其の場合死の引導を渡す高僧となるべき他の會員を毎晩擇ぶのですが、其の選定法を先づお話ししなければならぬのです。』とマルサスは答へた。

『おやまあ！ 左様すると彼等會員はお互に殺し合つて居るのですか。』と大佐は目を丸くして言つた。

『自殺すると謂つても面倒ですから斯ういふ具合にして其の面倒を除

くのです』とマルサス君は頷き乍ら答へた。

『まあ大變なことですな！』と大佐は大聲で叫んだ。『そして貴方か、それとも—私か—王—私の友達のことですが—が、誰か！ 今晚他人の

肉體並びに其の不死の聖靈を斬殺する役目に擇ばれるかも知れないのですか。那樣なことが苟くも人間同志の間で出来ることではないでせ

う。お、斯様な破廉耻なことは他には有りますまい！』と言つて恐怖の餘り立ち上らんとして居た際彼の目は王子の目と礫と合つた。王子は部屋の中から眉を擡め憤つた目附で睨み附けて居たので、ゼラルヂンは止むを得ず心を落附かせて語調を變へ乍ら、

『結局左様ぢや有りませんか。夫は兎に角那樣なに骨牌が面白いと仰有しやるのでしたら、例令何うなつても構いません—私は俱樂部の掟

に從ひます。』

マルサス君は大佐の喫驚嫌惡交々至るを見て大層嬉しがつて居た。彼は人を困らせて置いて夫を見て嬉しがる風が有つた。それで他人が可厭々々乍ら己を枉げて寛大なる情緒を示すを見て喜んだ、自分では、全然心が腐つて居て那樣な事には何ともなくなつて居る癖に……

『貴君は最初喫驚して被在しつたが今は吾等の會合が遣つて居ることを是認する位置に被在しやる。此の會合は賭博や、決闘や、羅馬劇場等に於ける種々の興奮を甘く結合して居る一つの完結した會合です。羅馬の異教徒も中々旨くは遣りました。私は彼等の心の開けて居つたことを賞讃いたします。併し我俱樂部のして居る此の思切つた痛快な而かも人生の奥義を極めた絶對痛烈事は皆一耶蘇教國即ち英國の爲め

に今迄保留せられて有つたのです。此の娛樂の味を解した人々は他の多くの娛樂は何んなに詰らないかといふことが解るでせう。』彼は猶ほ語を續け『併し此の遊戯の遣り方は非常に簡單なものです。一組の骨牌一併し貴君は程なく目のあたりそれを御覽になるだらうと存じます。一寸御手を貸して下さいませんか。私は不幸にも麻痺疾なのですから。』と言つた。

マルサス君が説明を始めようとして居たとき隣りの部屋に通ずる折扉が開いて會員は皆少し急ぎ加減で其の中へ這入つて行つた。此の部屋は何れの點に於ても前の部屋と同一で、たゞ部屋道具が少々違つて居たのみで有つた、中央に一脚の長い綠色に塗つた机が有つて、會長は其の卓子に倚つて一組の骨牌を非常に念を入れて切り乍ら坐つて居

た。例のマルサス君は杖をつき大佐の腕を借りても猶ほ歩行頗る困難で、彼の會員が既に一人残らず着席した時に漸く待つて居た王子と三人連で、其の部屋に這入つて来た位で、夫で三人は僅かに机の一番端の處に一緒に席を占めたので有つた。

『五十二組の骨牌ですとマルサス君は私語いた。スベイドの一に氣を附けて被在しやい、此の札に當つた人が今夜の番です又クラブの一に氣を附けて被在しやい。之に當つた人が其の下手人となるのです。羨しいですな！』と附け加けて『貴君方は目が宜いから能くお見えでせうが私は机越しには一と二を見分けることが出来ないのです。』斯う言つてマルサス君は眼鏡の上に今一つ眼鏡を掛けて身仕度をした。

『まあ兎に角皆様の顔丈けでも見て居なければ。』と言つた。

大佐は此の名譽會員から聞いたことを逸早く皆悉王子に告げ、又人を殺すか人に殺さるゝか孰れかになるのだといふことも特に念を入れ告げて置いた。王子は悪ろしき惡寒と心臓の邊が畏縮するのを感じたが、漸くそれを抑へて迷路に彷徨つて居た人の様にぎよろゝと周圍を見廻して居た。それを見た大佐は低聲で――

『思ひ切つて一仕打やれば未だ逃げられます。』

處が左様言はれたので王子の元氣は却つて回復して来た。

『まあ黙つて居れ！何うせ乗り出した船だ。何んな懸命の賭でもかまはず紳士らしく遣ることが出来るか何うか試みようぢやないか。』

彼は四邊を見渡して再び如何にも平氣を装つた。併し其の心臓は強

く且つ早く打つて何うしても胸中の不快なる熱を打消す譯には行かなかつた。會員は皆注意を緊張し、静肅にして居たが顔は皆蒼ざめて居た。就中マルサス君のは一際目立つて蒼然草の如くであつた。彼は眼を突き出し、頭を覺えず知らず頷かせ、又手を交互に口の處に持つて行き其の顫へて居て灰色を帯びて居た唇を攫んで居た。之を合はせ考へて見ると此の名譽會員は中々平氣で其の資格を保つて居た處ではなく却つて非常にびく／＼者で有つたことは明瞭で有つた。

『これから皆様始まりますから何卒。』と會長の聲。

そして會長は普通の反對の方向に悠然と骨牌を一枚／＼配り始め、そして一人々々の前に立止つて何が當つたかを點検して行つた。札は愈々生死を決定する恐ろしい闘なので大抵誰れでも躊躇しないものじ

なかつた、そして時には今貰つた札を返すときに手先がわな／＼と顫へて、一二度ならず返し損つて居たものもあつた。聽て王子の番が近づいた。彼も精神が段々興奮して來て殆んど息止りせん計りになつて居た。併し彼は性來幾分か賭博が好きなので有つたので可怖い中にも幾分か愉快が有るわいと思つて自分乍ら驚かざるを得なかつた。處が王子の前に落ちたのはクラブの九、ゼラルチンのはスベイドの三、そしてマルサス君のはハートのクエーンが當つた。此の時同君は嬉しさの餘り堰き來る嬉涙を押へることが出来なかつた。引次いで側の饅頭賣の青年はクラブの一を取つたので非常に吃驚し、暫らくの間其の札を指に挟んだまゝ恐怖の餘り戦慄へ上つて居た。彼は人を殺しに來たのではなくて殺して貰ふ爲めに來たので有つたのだ。王子は之を見

て同情禁んずる能はず、未だく廻つて来る彼並びに彼の友人の頭上に掛つて居た危険を殆んど忘却して居たものゝ如くであつた。

二度目の骨牌が廻つて来たが未だ肝心な死刑宣告の札は出て来ない。會員は片唾を呑み息を凝して居り、そして息をする時はたゞ喘いで居たのみで有つた。此度は王子にはクラブ、ゼラルデンにはダイヤが當つた。併し其の次マルサス君が札を返へしたときに彼は裂ける様な可怖い聲を發して席から起つたり坐つたりして居た。夫を見ると別に痲痺疾の患者といふ態度も見えなかつた。それは謂ふ迄もなくスベイドの一で有つて、此の名譽會員は死出の思出に此の餘計な餘興を演つて見た譯で有つたのだ。

札の分配も一段落を告げたので會話は再び湧くが如くに起つて來

た。會員は緊張して居た態度を急に弛めて大層寛いで卓子から起ち、二三人宛喫煙室に這入つた。會長は脊伸や欠伸をして一日の仕事もこれで済んだと言はん計りの體で有つた。獨りマルサス君は全く絶望の様子で自分の席に着いた儘、卓子の上に兩手をつき、顔を覆ひ、前後を忘れ、身動きもしないで居た。

王子とゼラルデンは直ちに俱樂部を辭し去つた。寒い夜の風に觸れて、今日のあたり目撃した事の恐ろしさは益身に沁み入る様に感ぜられた。聽て王子は——

『あゝ彼様な事で誓をさせ人を束縛するとは！ 斯様な大雜ばな人殺の商賣をさせて金を儲けさせたが上に剩に何等の處罰もしないとは！ 若し私だけが彼の誓約を破棄することさへ出来れば宜いのだがな！』

『誓約を御自分で破棄なさるといふことは到底出来ない御相談で御座います。殿下の名譽は取りも直さずボヘミヤの名譽で御座いますから。併し私は遣らうと思へば私の誓約丈は別に不都合なしに破棄することが出来ると思ひます。』と大佐は答へた。すると王子は、

『ゼラルデンよ、お前が私の冒険に従いて來乍ら不名譽の毀を受ける様なへまなことを遣つたとすれば私は當にお前を許さないのみならず—お前も驚くだらうが—私は自分の怠慢をも勘免しない積りだぞ。』
 『殿下の御命令は承知いたしました。斯様な處で愚圖々々致しませんで一先づ歸りませう?』

『左様、是非馬車を呼んで呉れ、そして、今晚の不面目な事柄を寝て忘れて了はうではないか。』



HAKUFEI

茲に、王子が其處を去るとき其の四辻の名前を注意して讀んで置いたといふことは特に注意して置くに足ることであつた。

翌朝王子が目を覺すとゼラルヂン大佐は其の日の或る日刊新聞を持つて來たが次の記事に印が附けて有つた。

(悲惨なる出來事—今朝二時ウエストボーングループ、チエブスト
ープレイス十六番地バーソロミュー、マルサス氏は友人の家で催した會合の歸途、トラファルガルスクエアの上部胸壁の上から落ちて頭蓋骨を割り、足と手を片々宛挫折して即死を遂げた。マルサス氏は此の際一人の友人と一緒に馬車を搜して居たので有つた。彼は何でも平素麻痺疾で有つたから或は突然の發作からして此の不幸に出會はしたのかも知れない。兎に角氏の名は上流社會に知れ渡つて

居るので有るから、此度の惨死は一般に同情を以て哀悼せられることと有らう。

王子が讀み終るや、大佐は、『死んでから眞逆様に地獄へ落ちた靈魂が有つたとすれば、それはあの麻痺先生ので御ざいませう。』と眞面目腐つて言つた。

王子は手で顔を掩ひ乍ら暫らく沈思黙考の態で不つた。大佐は猶ほ續けて、

『あの男が死んだといふことを聞いて、私は寧ろ彼の爲めに喜ぶので御座いますが、併しあの饅頭賣の青年のことを思ふと私は氣の毒でないませぬ。』

『ゼラルヂン』と王子は顔を揚げて、『あの若者は昨晩は吾等同様無罪

で有つたのだが、今朝は殺人といふ大罪を犯したのだな。あの會長のことを思ひ出すと私は胸が塞がつて氣持が悪くなる。私は今何うして宜いか解らないが、兎に角何とかして是非彼の無頼漢を掴まへて遣らう。是を思ふとあの骨牌遊は面白い經驗で有り、又よい教訓で有つたな！』

『誠に仰せの通りで御座いますが決して又と行るべきことでは御座いませぬ』

王子は非常に長い間返事をしないで居たのでゼラルヂンは心中竊かに心配し始めた。

『殿下は何んなことが有つても二度と彼處へ御出被成ることは相成りませぬ。貴方は彼處で既に随分可怖い事を御經驗になり、又御覽にな

つたでは有りませんか。高貴なる御身分をお考へなさいましたら、斯かる危険を繰り返し被成ることは出来ない筈で御座います。』

『お前の言ふことも尤だ、そして自分も今夜も行かうとして居る此の決心に就いては満更不快に思はぬでもない。あゝ君王となるべき身で有り乍ら、矢張り一箇の人間に過ぎないのだ！自分は此の度位自分自身の弱點を強く感じたことはない、ゼラルデンよ、併し此の弱點の方が自分よりは強いので何とも仕方がないのだ。數時間前に吾等と一緒に晩餐を共にしたあの不幸なる青年が何うなつても宜いと思ふ氣に何うしてなれようか。又あの會長にあの儘で斯かる極悪の職業に従事せしめることが何うして出来るで有らう？ 私は那樣な心神を恍惚たらしめる様な冒険に手を着け乍ら、終りまで遣り徹さないで置くことが何

うして出来よう？ 否々到底那樣なことは出来ない。ゼラルデンよ、お前は私をたゞ王子と見て諫言をするので、人間としては迎も出来ない相談を持掛けて居るのだ。是非今晚最う一度、自殺倶樂部の卓子に着かうではないか。』

ゼラルデン大佐は恭しく脆いて、『何卒私の命をお取り下さいませ。私の生命は殿下のもので御座います—御勝手になさつて下さつても宜しう御座います。併し何卒又と彼様な危険を冒すといふこととは私は私に仰有しやらないで下さいまし。』と切りに歎願した。

『ゼラルデン大佐よ。』と王子は幾分威丈高になつて、『お前の生命は絶對にお前のものだ。私はただ服従を欲したのみだが、其の服従が心からのでなければ私は一向それをも求めない。たゞ一言附け加へて置く

が、此の事柄に關しお前の強情な諫言は既う澤山だぞ。』

大佐は直ちに立ち上つて言つた、

『殿下、何うも恐縮の至りで御座いました。それでたい今日午後一寸お暇を頂く譯には参りますまいか。私は自分の家事の整理並びに遺言等遣る可き職責を果たして置かなければ、到底名譽を尊重する人間としてはあの生命を賭けて行かなくてはならない様な那様な危険極まる所へ二度と参りませんから。苦しお許し下さいますなら此の忠義深い私御恩を受けた私は何うして又と諫言を致しませう。』

『ゼラルデンよ、お前が私は王室に屬するものだといふことを思ひ起こすときは、私は何時でも殘念に思ふ。一緒に行くといふのなら今日は何をしても宜いが、十一時前までには同じ變装で此處へ來て居つて

呉れ。』

其の夜俱樂部は左程一杯でなかつた。王子とゼラルデンが行つたと、喫煙室は五六人計りしか居なかつた。王子は會長を一寸側に連れて行つて、マルサス君の死したることを慶賀し、心からのお世辭を述べた、

『私は才能の人を好みます、そして貴方の才能には誠に驚き入りました。此の俱樂部の事業は中々微妙な性質のもですが、貴方はそれを巧妙にして而かも秘密に遣つて退ける丈の力量を充分お有ちだと存じます。』と王子は言つた。

王子から上品な態度で斯様なお世辭を言はれて見ると會長も幾らか嬉しくないでもなかつたので、恭しく、それを愛け、斯う言つた、

『あれも可哀想な男です！私にはあれが居ないと、何んだか物淋しい様に思われます、倶楽部は無いも同然です。此處に来る客は御覽の通り重に小年輩です。そして彼等は餘りに詩的ですから、私には能く合はないのです。マルサス君は詩的でなかつたのではないのですが、夫は私が了解することの出来る程度のものでした。』

『貴方がマルサス君に御同情なさいますといふことは如何にもと思はれます。彼は一風變つた人の様に思はれました。』と王子は答へた。

此の時丁度クリーム饅頭の青年は其の部屋に居つたが、見るも氣の毒相に鬱々として沈黙を守つて居た。王子とゼラルデンは宥めて、話をさせようとして見たが、何等の効果はなかつた。青年は只管お詫のみして言ふには――

『私は貴方々を斯様な不名譽な處にお連れ申したことを非常に後悔して居ります。未だ人を殺さない間に早くお立退下さいまし。貴方々は老人が倒れるときの叫び聲や、鋪石の上で碎ける骨の音を逆もお聞きになることは出来ませうまい。苦し貴方々が私の様な斯様な零落れた者に對し御同情下さるなら――今晚私にスベイドの一が當る様に祈つて下さいまし。』

段々夜が更けるに連れ又五六人の人が遣つて來た、併し愈々骨牌を取る時刻迄に僅かに十三人着席した計りで有つた。王子は前夜同様に心配中にも一種の愉快を感じて居たが、腑に落ちなかつたことはゼラルデンが前の晩よりは余程泰然自若として居たことで有つた。

『遺言をしたのか或は一旦したのを遣り直したのか知らないが、兎に

角遺言をしたといふことが青年の心を彼様な落附かせるものかしら』と王子は非常に奇態に思ふて居た。懸て、

『それでは皆様始めませう！』斯う言つて會長は骨牌を配り始めた。

札は三度廻つたが、未だ例の二つの札は出て來なかつた。四度目に札が廻つて來始めたときの會員の興奮は非常なもので有つた。残つた札は丁度もう一度廻る丈有つた譯だ。會長の左側の人から數へて二番目に居た王子は—此の俱樂部では札を配る順序が反對で有つたから—終りから二番目の札を貰ふことになつて居た。四度目の右側の一番の人は黒の一—それはクラブの一で有つた—を取つた。次の人がダイヤを、次がハートと段々進んで行つたが、スペイドの一は未だ渡されな

い。順番は移つて來て王子の左に坐つて居たゼラルデンが札を返して

見たときに一で有つたが、それはハートの一で有つた。

王子は謂ふ迄もなく中々剛膽な性質の人で有つたが、此の生死を決する札が自分の前に置かれた時には流石彼の心臓も恐怖の餘り殆んど鼓動を止め、顔には汗が淋漓として流れ出たので有つた。残りの二人の中何方か、死札を取らなければならなかつたのだ。運を天に任せて卓上に落ちた札を返へして見ると、果然、それがかのスペイドの一で有つた。即ち今晚殺される番に當つたのだ。王子の頭はワン／＼と鳴つて來て眩暈がし始めた。彼は自分の右側の人が歡喜とも失望とも就れとれない様な發作的の大笑をして居たのを聞いた。會員は散つて行つたが彼は萬感交々至りて胸一杯になつた—實に馬鹿な實に罪深い行動をしたものだ。此の未だ春秋に富み健全な體軀を有ち且つ又何時

かは王位を繼ぐべき身で有り乍ら、自己の將來並びに忠勇なる國民の將來を打ち盡したのだ。『天帝よ何卒お許し下さい！』と彼は叫んだ。斯う言つたので彼の亂麻の如く打ち亂れたる心は忽ち鎮つて心神全く平然たるを得た。

此の時不思議なことにはゼラルヂンは逸早く姿を隠した。其處には下手人と饅頭屋の青年の外誰も居なかつた。王子を殺すべき人は會長と何やらん、相談をして居た。そして饅頭賣の青年は王子の處にこつそり遣つて来て斯う私語いた――

『誠にお仕合で御座いますな、貴方の御幸運を、持ち合はせがあるなら、百萬圓でも出して買ひたいと思ふのです。』

王子は其の青年が出て行つた時、自分の運が賣買出来るものなら未

だ安價で賣つても可いと思つたので有つた。

相談は既う濟んだと見えて、クラブの一を持つて居た男は一切を承知した様な顔をして部屋を立ち去つた。そして會長は不幸なる王子の處へ遣つて来て握手を求めた。

『貴方にお目に掛けることが出来、其の上なにかしのお役に立ちましたことを私は嬉しく存じます。まあ遅かつたといつておこぼしになることは出来ません。御入會なすつて二晩目です――非常な御幸運では御座いませんか。』

王子は何か返答をしようとして試みて見たが口は乾き舌は痺痺した様になつて文句の出ようがなかつた。

『貴方は少しお氣分でもお悪いのですか。』と會長は心配相にして訊い

た。『大抵のお方は左様お成りです。ブランデーを少し計りお召しなさいませんか。』

王子は首肯いて同意の意を示したので、會長は直ちに大洋盃の中に酒を注ぎ込み之を王子に薦めた。

『可哀想なのは老人のマーシイでしたな！』と王子がグイと洋盃を呑み乾した時に會長は言つた。『彼は殆んど三合餘りも飲んだのでしたが、餘り利けめもなかつた様に見えました！』

『私は酒を戴くと直ぐ治る性です。』と王子は大層元氣付いて。『私は御覽の通り既う平常の通りになりました。處で今から何うしたら可いのか早く仰有しやつて下さい。』

『貴方は此のストランドに沿ふて町の方に進み、それから左側の鋪石

道を真直に行つてお出になると、丁度今部屋を去つた方にお逢ひになります。其の後の事はあの方が知つて居ます、そして其の指圖に従つて下さい。俱樂部の全權は今晚あの方に委任して有るのです。ぢやあ御機嫌宜しう！』

フロリゼルはもじくし乍ら答禮をして暇を告げた。彼は喫煙室を通つて出たが、其處には骨牌取りの大部分は猶ほ三鞭酒を飲んで居た。其の三鞭酒の幾分は彼自ら注文して、代價を支拂つたもので有つた。

此の時彼は自分の心の中で此の連中を詛つて居るといふことに氣附いて、自分乍ら喫驚しない譯には行かなかつた。廳て例の内房で帽子と外套とを被り隅の處から洋傘を選び取つた。此の帽子や外套などは随分被たり脱いだりしたものだ、最う之が最後だと思ふと何んだか可

笑しくなつて、覺えず知らず發作的に大笑をしたが。自分乍ら實に不愉快な笑聲の様に思つた、彼は何だか部屋を去たくなかつたので、一寸の間窓の處に身を寄せ乍ら外を打眺め、闇黒中に點々たる遠近の燈火が點いて居た光景を見て居たが忽ち正氣附いて來て――
『待つて――私は確かりしなくてはならない、そして可厭でも應でも行かなくてはならないのだ。まゝよ、男らしく死に就かう。』と彼は考へた。

ボックススコートの廻り角の處迄來ると、三人の男が突然驀進し來り、フロリゼル王子を引捕へて、無理無體に馬車の中に連れ込み、驀地に何處かへ馳せ去つた。其の車中には既に今一人の同乗者が乗つて居た。『殿下少し遣り過したかも知れませんが、失禮の段は何卒お許し下

さいませ。』と聞き馳れた聲で言つたのは紛れもなく大佐で有つた。王子は嬉しさの餘り大佐の首に抱き附いて彼に接吻した。
『何うしてお禮をしよう？一體何うして斯様なことが出來たのだ？』王子は固より死所に進む決心をして居ただけけれど、大佐の眞心より出た此の暴行に身を委ね、今一度希望に充ちた生涯に歸るといふことを非常に喜んで居た。

『最う今から斯様な冒険は一切お止しなさいますといふことで御座いましたなら有難いので御座います。第二のお尋に就いてはただ一切が最も簡単な手段で運ばれたと申し上げるより外は御座いません。私は今日午後、一人の評判の刑事巡查と、充分秘密を遵守するといふ約束の下に打合を致し、又お金もうんと握らして置きました。殿下の召使

のもの共が主として此の事柄に従事いたしましたので御座います。ボックスコートに於けるあの倶楽部の周囲は日の暮れ方から取り巻かれて厳しく警戒せられ、そして此の馬車—實は殿下の馬車で御座います—が—は殆んど一時間以前から殿下をお待ち申して居たので御座いました。

『そして私を殺す役目の可哀想な奴は—あれは一體何うしたのか。』と王子は訊いた。

『あの男は倶楽部を出た時早速、腕枷で縛りつけられました。今頃は御旅館で殿下の御裁判を待つて居ります。そして間もなく彼の同類も參るで御座いませう。』

『ゼラルデンよ、お前は私の嚴命に反抗して迄も私を救つて呉れた。

そして能くやつて呉れた。お前のお蔭で嘗に生命を拾つたのみならず、大教訓を得たのだから、此の儘に打棄て、置いては恩師に對し私としての面目がない譯だ。褒美は希望通りにしよう、慮外なく言つて呉れないか。』

夫で話は暫らく杜絶れた。其の間馬車は轆々として街頭を急いで進行し、二人は沈黙考に耽つて居た。聽てゼラルデン大佐が先づ沈黙を破つた—

『殿下今頃は多くの罪人が集つて居ること御座いませうと思ひます。其の中の一人丈は特に公平に取扱つて頂かなければなりません。吾等が會長と斯く誓約した以上は、たゞ法律のみを楯に取ることは出来なないで御座いませう、そして縦や誓言は弛められたにしても、苟

くも男子として思慮分別の有るものは、那樣なことをして平然として居ることは到底出来たものでは御座いません。お考を聞かせて戴きたいと存じます。」

『私の考は既う決つて居る。會長は決闘で斃れなければならぬ。暫だ相手を誰れにしようかと思つて居る。』

『殿下は私に對する褒美は私の希望通りにして遣らうと仰有しやいました。それでお願ひいたしますが何卒私の弟を任命して下さる譯には參りますまいか。この決闘の相手になるといふことは誠に重大な任務で、且つ名譽なことで御座いますが、愚弟は屹度男らしく此の務を果す丈の技量は有つて居ると存じて居ります。』

『お前の願は餘り望ましようはないが、併し私は反對する譯には行かま

い。

大佐は嬉しさの餘り恭しく王子の手に接吻した。此の時馬車は既に王子の立派な旅館の拱廊の下を通つて居た。

一時間後、フルリゼルは、王子の制服を着け、ボヘミヤの總ての勳章を胸に一杯飾つて、自殺俱樂部の全會員を引見した。

『君方は何たる愚な且つ又邪惡な人々で有らう。金が無い爲め斯様な破目に陥つた人達は皆、私が命令を傳へて置いたから、私の役人共から職業とそれに對する報酬とを宛行つて貰はれたらよからう。大罪を犯して良心の苛責に耐えない人々は私よりも一層高い、そして一層寛大なる神様の御前に行き、其の加護を祈らる可きで有る。私は君方の想像以上君方に同情して居る。で明朝、皆身の上話をして貰はう。そ

して其の時充分打明けて話せば救済の途も容易な譯で、出來得る限りの面倒を見て上げよう。そして君方の様な伶俐な人に對しては」と王子は會長の方に向いて『金なんかを差上げては却つて失禮かとも思ひますから、それは止して其の代り一つの娛樂を遣つて貰いたいと思ふのです。此の娛樂は英國では出來ないので、今丁度此處に』と言つて大佐の弟の肩に手を置き『一寸大陸へ旅行したいと言つて居る部下の一士官が居ます。』それで一緒に大陸旅行に出掛けて貰い度いのです。斯くて急に音調を變へて話を續け。『貴方は拳銃が旨く打てますか。此の度の事にはそれが屹度必要なことでせう。二人の男子が一緒に旅行するときは拳銃位携帯して居ることは萬事用心の爲めに宜いことです。附補して置きますが、萬一何かの機會でゼラルデンの弟が

負けたときは、他の家來を差遣はし貴方の御相手を致させませう。そして何んなことが有つても貴君を逃がし終ふ様な手緩いことはしませんからね。』
と王子は非常に嚴格に言つてそれで宣言を打切つた。翌朝俱樂部員全體は王子の寛裕に依つて皆夫々適當に食扶持や宛行物を授けられた、そして會長は王子の手許で善く訓練せられた腕前の有る二名の從僕を連れて居る大佐の弟の監視の下に旅行にと出掛けた。王子は俱樂部の總員を斯く片附けたが、それでも未だ満足しないで、確乎とした部下共を遣つてボックススコートに於ける俱樂部の建物を占領せしめ、又俱樂部宛に來る書狀とか其の役人の所に來る訪問者とかは皆王子フロリゼル親ら之を檢閲引見することにした。



(饅頭屋の話は是れでお終です。たゞ彼は現にカヴェンデッシュ、スクエア、ウイグモア街で相應の家主になつて居ますこと丈申上げて置ませう。番地は憚る處有つて、申し上げません。猶ほ王子や會長に關する冒険談は次回の大靴物語に譲りませう。)

醫者と大鞆物語

サイラス、キュー、スカツダモアといふは素朴にして無邪氣な一年年で有つたが、音に名高き佛京巴里見物を思ひ立ち、此度遙々亞米利加から遣つて来て、學生町拉典街の一旅館に落ち着いた。彼は餘り人氣の宜くない新大陸の一地方たるニューイングランドから来た人として、實に珍しい人だといふので到着早々名聲噴々といふ有様で有つた。處が非常な金持で有り乍ら至つて客齋坊で、常に小さな紙の表紙の手帳を携帯し、自分の費用を一々控えて居つた程で有つた。彼が巴里の繁華を眺める爲め拉典街の高等旅館しかも其の七階を選んだの

もその爲めで有つた彼は斯く一際目立つて吝嗇な男で有つたが、仲間にも善く知れ渡つて居て、最も評判になつて居たのは主として自信のないこと、また初心な所から生じて来る所謂美德で有つた。

此の男の隣室には非常に愛嬌の有る風采をし、非常に優美にお化粧をする一婦人が居た。それで青年は到着早々此の女を見て屹度伯爵令夫人だと思つて居た。其の中にこの婦人はマダムゼフィリンといつて今迄とて何等爵位の附く様な地位の者ではなかつたことが分つて来た。

處で此の婦人は中々隅に置けないので此の亞米利加青年を惱殺せん恨膽有つてか、階段で出會す時には屹度丁寧に一寸思はせ振りの挨拶をしたり、何かしら愛嬌有るお世辭を振撒いたり、時には美しい黒い眼で倒す様な秋波を送つて見せたりして得々然とし、そして分れて行くと

きは絹地の音をさらりと立てたり、又綺麗な足や踵を見せるのを常として居た。併し婦人の方から斯様なに進んで手出をする、スカッダモーア君は却つて益陰鬱に引込み思案になつて来て、女が如何に骨折つても彼の氣を引き立たしめるのは容易の事ではなかつた。其の中に婦人は青年の部屋に度々摺附木を借りに來たり、又は自分の龍犬が何か悪戯をしなければなかつたかなどと、ぼけた風で挨拶に來たりする様になつた。併し青年は那樣なに偉い人間の前では口が利けなくなり、少しは習つた佛蘭西語も直ちに何處かへ行つて了つて、たゞ婦人が部屋を去るまで吃りながらちつと見詰めて居たのみで有つた。斯く青年は女との交際は極く淺かつたけれど、彼が五六人の男同志とのみ居るときは、お目出度いお惚氣も随分盛んに出したので有つた。

青年の部屋の向側には一此の旅館には一階毎に三つの部屋が有つた
 一餘りはやり相にもない一寸年配の英國醫師が滞在して居た。其の名
 はノエールといつて倫敦では可なり手廣く遣つて患者も多かつたのだ
 が、故有つて其處に居られなくなり、警察の教唆に依つて巴里に引越
 す様になつたのだといふことで有る。兎に角若い時は彼も随分名聲を
 博した人で有つたが、今は拉典街で非常に簡單な且つ孤獨な生活をし
 て、そして大抵醫學研鑽の爲め日を送つて居た。スカッダモーア君は
 彼と知り合になつて、そして二人は時々打連れて街向ふの料理屋で二
 三品取つて食事をするこゝさへ有つた。

前述べたサイラス、キュー、スカッダモーア君の性格は未だ初心な
 處が有つて恕すべき點がないでもないが、此の男は他に未だ如何

はしい小惡徳を幾つも有つて居た。そして感じも鋭敏な方ではなかつ
 たから、斯様な惡徳に耽つて種々曖昧な事をしない様に自己を制御す
 るといふこともなかつた。就中好奇心は彼の短所の内重なるもので有
 つた。彼は生來の喋舌屋で有つたが、今迄無經驗の生涯と來ては殆ん
 ど狂せん許りに興味を有して居た。要するに彼は無遠慮で何事でも一
 旦耳目に觸れたことは根氣善く穿鑿探究其の正體を見抜く迄は執拗く
 出る男で有つた。彼が手紙を郵便箱に入れに行くときなど、それを手
 で量つて見たり裏表ひつ繰り返して宛名を念入れて讀んで見たりし
 て居た。那樣な風で有つたから彼の部屋とマダムゼフィリンの部屋との
 間の牆壁に小さい罅穴など有ると、それを填充することはしないで、却
 つて、之を擴大し、隣室の様子を探知する覗穴に利用して居たので有

つた。

時は三月の終りの或る日のことであつた。此の覗見といふ唯一の樂みに耽つて居る中に、彼の好氣心は強くなつて彼は遂に其の穴を今少し擴大して隣の部屋の一隅まで見える様にした。其の晩景、彼がマダムゼファイリンの行動を偵察しようとして穴に眼を當てたとき、驚くべし、隣の方では變なことをして穴を暗くした。併し其の障害物が急に取去られ、くすくすと笑ふ聲が彼の耳に這入つたときはひどく顔を根らめた。隣の室に壁土が落ちて居たので此の覗穴の秘密も明らかに敵に知られて了ひ、そして隣の方でも其の返禮として同じ様に見をして居たので有つた。スカッダモア君は大層弱つて居た。彼れは先づマダムゼファイリンを用捨なく非難し、そして自分でも器量を下

げたなと心が咎めないでもなかつたが、其の翌日は先方が何等妨碍の手段を取らなかつたので、彼は乗氣になつて其の無頓着に附け込み、又好な悪戯を續け、役にも立たぬ好氣心を十二分に満足させて居た。

其の次の日も彼は例の如く覗見に餘念なかつたが、不思議なことにマダムゼファイリンは長い間サイラス君が今迄見たことのない年頃五十恰好の丈の高い、弱相な體格をした男の訪問を受けて居た。其の男のすこつち織の服や色附の襦袢を着て其の上見窄らしい頬鬚を生やかして居る處は一見して英國人で有るといふことが直ぐ分つた。そして其の不活潑な灰色の眼を見たとき、サイラスは慄然としたので有つた。彼は頗る低聲で話をし其の間口中をむぐぐと動かして居た。青年は

猶ほ靜かに彼等二人の様子を見て居ると一再ならず自分の部屋のことを言つて居る様に思はれたが、判然したことは能く分からなかつた。併し能く／＼注意して聞いて居ると、確かに聞き取れたことは、英國人が何が婦人に拒まれたか、夫とも反對せられたことに對して答へる様な具合に、幾らか高い調子で斯う言つて居た詞で有つた。

『私は彼の人の趣味を極詳細に研究しました、繰返へして申し上げますが、貴女は私が手を附けることの出来る婦人の中で最適任者です。』

其の返事としてマダムゼフィリンは溜息を吐き、そして、此の絶對の權力には逆も抵抗することは出来ないから致し方なしに引受けるのだと言はん計りの様子をして居た。

其の日の午後になつて例の穴は遂に塞がれて了つた、即ち戸棚が隣

室の穴の處に据えられたからで有つた。そしてサイラスガ此の災難は、あの英國人の意地悪い入智慧に違ないと思つて悲嘆に暮れて居た間、受附が女文字の一通の手紙を持つて來た。其の手紙は少し間違の有る佛蘭西語で、大層乗せかける様に青年に其の晩の十一時にブリエール舞踏場内のと或る所へ來いと書いてあつたの案内狀で有つた。併し不思議なことには署名がなかつた。それで青年は行き度も有るし可怖くも有るし長い間煩悶して居た。時には固くなつて行かないと決めて見たり、又時には一心不亂になつて是非行つて見ようと心を逸らせて居た。其の結果十時餘程前、サイラス、キユー、スカッダモーア君は燕尾服を着て堂々とブリエール舞踏館へと乗出し、其の入口の所に立つて、幾らか面白さうな悪戯半分の氣持で、入會金を差出した。

丁度カアニバル祭の頃とて舞踏場は一杯で非常な賑ひで有つた。燦爛たる燈火の光と織るが如く往交ふ群衆とは、初めの程は此の青年冒險家の心膽を奪つたが、應て逆上させ又酔はせて了つて、そして其の次には平生よりも却つて大膽な人にして了つた。彼は今に悪魔が遣つて來るのだと覺悟を極め、空元氣を出して、舞踏室につか／＼と這入つて行つた。斯く傲歩して居る中、不圖目に映つたのは、マダムゼフリンと例の英國人とで、兩人は柱の陰で何事やらん相談して居た。立聞して遣らうといふ猫根性が忽ち起つて來た。彼は脊後からこつそりと二人に近づいて話の聞える處迄遣つて來た。

『彼方が其の男です。彼處に――長い金髪を有つた、それ――緑色の着物を着て居る娘に話して居る――ほらあの人は英國人の聲』

で有つた。

偕て首を揚げて其の方を見ると成程斯う言はれて居た當面の人たる小柄の大層綺麗な青年が居た。

『宜いことよ。ぢや精一杯遣つて見ませう。併し何んなに腕の有る人でも斯様なことには失敗らないとも限りませんからね。』と今度はマダムゼフリンの聲。

『何を仰有しやいます、貴女がお遣り下されば成功請合です。三十人の中から貴女を選抜したのぢや有りませんか。さあ遣つて下さい、併しあの王子に氣を付けて下さい。まあ何うして彼の方は今晚此處に被在したのでせう。恰かも此の學生や商店の賣子供の底抜け騒ぎの他に巴里には見る價値の有る佳い舞踏が一つも無いのだと謂はん許りです』

わね！あの坐り方を御覧なさい！祭日に於ける王子といふよりも、本國に於ける帝王宜しくといふ體ですわね！」と彼女の連は言つた。

サイラスは此の時も亦運よく其の王子とやらを見當てた。其の人は一際目立つて眉目美しく、且つ餘程確乎した骨格で、而も慇懃にして威嚴の備はつて居た方で有つた。其の側の椅子には五つ六つ年下の立派な青年が侍つて非常に鄭重に話掛けて居た。兎に角王子といふ語はサイラスの如き共和政體の國人には耳新らしく難有く聞えた。だから今王子の様子を目の當り見て其の平常の魅力に參つて了つたのも無理からんことだ。彼はマダムゼフィリンと其の連なる英國人は勝手にするがまゝに、打遣らかして、そして集會を通り抜け、王子と其の従者とが着いて居た卓子に近づいた。其の時王子は斯う話して居た、

「ゼラルデンよ、此のお前の弟の遣り口は確かに狂氣染て居るね。還らんことを言ふ様だが、お前が自分で弟を此の決闘相手に選んだのではないか、だからお前は弟の行動を監視して居なくてはならないのだ。第一彼は巴里で長く愚圖々々する積りにしたが、遣つ附けねばならぬ敵手の性格を考へて見ても、それが既に輕卒なことだ。彼が倫敦を出發してから未だ二日にもならないとき、又二三日中には一か八かの仕合をしなくてはならないときに悠々此處で時を過して居ても宜いものか。本當を言ふと、君の弟は今頃は射的場で拳銃の稽古をしたり、適當な足の運動をしたり、又よく睡眠し特に白葡萄酒やブランデーなどを飲まないで、嚴重な料理法に依つて遣つて居なければならぬ筈だ。君の弟は吾等が皆冗談事をして居るのだと思つて居るのか。ゼラルデ

ンよ、此の事件は非常に真面目なことだよ。』

『仰の事は一々御尤の事で御座いますが、何卒御安心被成つて下さい、實は愚弟のことは能く存じて居りますので別に口出することは要らないし、又人様から何と謂はれても驚かない位信用して居るので御座いますから。彼は殿下の御想像も及ばぬ程注意深い、其の上不屈不撓の氣象を持つた奴で御座います。若し彼の敵手が婦人で御座いますなら、斯様に力瘤を入れて申し上げべきでは御座いませぬ。兎に角私は寸毫の顧慮なく愚弟並びに二人の従者に會長を遣つ附けることを任せて置いて差支無いと存じます。』

『左様言へばそれで満足だが、併し私は未だ安心した譯ではない。此等二人の者は善く訓練せられた探偵だ。にも係はらず、此の悪漢を既

に三度も監視らか逃れさせ、數時間も打續けて秘密な、そして屹度危険な仕事に従事させたではないか。素人なら偶然見失ふことも有つたかも知らんが、併しルドルフとゼロームとが追駈損つたとすれば、是は何うしても斯くさすべき確かりした理由を有ち、其の上非凡なる謀略を廻らす敵の或る人が有つて、其の人の目論んだことにまんまとかゝつたのだとしか思はれない。』

『私が愚弟を推薦致しました以上は今仰せの事は私と愚弟との間の問題になつて居ることゝ存じますが。』とゼラルチンは少々怒つた語氣で答へた。

『ゼラルチン大佐よお前の言ふ通りだ。だからね、お前は尙更私の忠告を聞かなくちやならないのではないか。まあ此の話は最う止さう。』

あの黄色の着物を着て居る娘は大層上手に踊るね。」と王子フロリゼルは話を他に轉じた。

而して二人の間の話題は、カーニヴァル祭に於ける巴里の舞踏場の有り觸れた問題に變つて行つた。

此の時サイラスははつと己れに歸つて、最早約束の場所に行かなければならぬ時間だと思つた。併し考ふれば考ふる程、彼は其女に逢ふことが可厭になつた。此の時観客は非常に雑沓し始め、サイラスは入口の方向に押し出され始めた。彼は抵抗もしないで押さるゝが儘に身を任せて居たが遂に棧敷の下の隅の處に押し詰められた。其處で偶々聞えたのはマダムゼフィリンの話聲で有つた。婦人は佛蘭西語で話をして居たが、其の相手は三十分経たない前あの見知らぬ英國人が指差して

居た例の金髪の青年で有つた。

『私は此の事を私の性格を賭けても何處迄も秘密に致します。縦や左様までしないにしても愛から出た條件でなければ賭けますまい。屹度秘密に致します。御安心下さい。併し貴方はたゞ門番にそれ丈仰有しやりさへすれば屹度黙つて御通し致します。』と女の聲がする。

『併し此の債務の話は一體何うしたのですか。』と相手が反對した。

『おやまあ！それは私の居る旅館のことですもの、那樣なに分り切つたことが私に分らないと思召すのですか。』と彼女は言つた。

そして此の美人は相手の腕に愛苦しく縋り附いて出て行つた。是を見てサイラスは例の手紙の事を思ひ出した。

『今十分後には俺も彼様な美しい、そして未だ立派な服装をした婦人

と一緒に歩くことが出来るのだ—多分本當な貴婦人で、ことによると爵位の有る婦人かも知れないぞ。』と思つて獨り得意になつて居た。そして斯うは思つたものゝ手紙の中の佛蘭西語の綴り方が變で有つたことを思ひ出して彼は稍失望の容子で有つた。

『併し、あの手紙は侍女の代筆かも知れない。』と考へ直して見た。

斯様なことを思廻し乍ら不圖柱時計を見ると僅か數分で十一時になる處で有つた。時間が段々近づくに連れサイラスの心臓は一種異様なそして幾分か氣持の悪い早さで鼓動し始めた。併し彼は返事を出さなかつたのだから、是非顔出しをしなければならぬことにはなほと思つてほつとした。だが併し美人の折角の親切を無にするのも濟まないから勇を鼓して行かうかと思つたり、それにしても何うも何だか氣が退

ける様にも有るし、暫時躊躇して居たが遂に自ら決心して行くことに極めた。斯う決心したからは今や彼は反對の方向に動いて居た人々の流に逆らつて奮闘しつゝ、出口の方に進んで行つた。サイラスは此の際限のない抵抵の爲め少し弱り氣味になつて居たのか、それとも面倒臭い、いつそのこと打遣つて了はうかと思つて居たのらしかつた。併し兎に角彼は進んでは戻され進んでは戻され少なくとも三度許り押し返されたが、無理に群衆の中を割込んで遂に指定の場所から五六呎許りの隠れ場所に漕ぎ附けて其處に立留つた。

此處でサイラスは又煩悶し始め、そして幾度も祈禱をして神に救を求めた。是はサイラスが幼少の時分宗教的教育を受けたからで有つた。此の時彼は女に出會はず氣は少しもなく、たい男らしくないと思はれ

はしないかと下らない心配をして居た計りでよう逃なかつたので有つた。併し此の心配が案外強くて多くの色々な考へを打消した。けれども之が爲めに思ひ切つて進むこともしないし、それとて又逃げることもようしなかつた。柱時計は最う十一時十分になつて居た。青年サイラス君の精神は逆上せ始めた彼は隅の處を覗き廻つたけれど會合の場所には誰も居なかつた。屹度あの手紙を遣した見知らない婦人は待草臥れて還つて了つたのではあるまいかと居ひ詰て了ふと、此度は前の臆病心は何處かへ行つて、却つて大膽になつて來た。來ようは遅かつたが、兎も角約束の場所までは來たのだから怯懦の誹を受けることはない。一人で極めて見たり、又あれは誰か他の人が自分に一杯喰はせる爲遣したの手紙で有つたのだと思ひ始め、そして斯う先方の秘密が分る

様になつたり、又奴等の奸計の裏をかいてやつた所など仍且自分にも狡猾い處が有るのだと思つたりして獨り得意になつたりして居た。一體若輩等は斯様な下らない考へを捏造して獨り得々然となるものだ。斯く考へて彼は其の隅から思ひ切つて出て行つた、併し二三歩も進んだと思ふ頃不圖柔かい手が彼の腕に觸つた様な氣がした。振り返つて見ると一人の大柄の婦人で、其の顔は幾分か威嚴の有る重々しい處も有つたが、別に不深切相な面貌もして居なかつた。

『貴方は本當に女殺で被在しやることよ—貴方が妾を待たして被居しやる處を見ると本當に左様で御座いますわ。兎に角私は貴方にお逢ひしうと決心して居ましたのですよ。女の最一念は強いもので何んなに翱られたつて那樣なことなど何とも思つて居ませんわ。』

サイラスは彼に手紙を遺した此の女が如何にも大柄なので先づ威壓せられ、又其の惚々しい様子で唐突に襲撃して來られたので全く壓倒せられて居たが、女は其處は旨いもので如才のない愛嬌を振り撒いて直ちに青年を安心せしめた。女の行動は大層温和で且つ深切であつた。女はサイラスに種々な面白いことを言はせる様にし、そして彼が何か言ふと高聲で褒め散らして居た。暫くの間阿諛に加へて温めたブランドーをどしどし薦め、それで青年を全く魅し惚れ込ました計でなく、自ら進んで臆面もなくお戀情を悉く吐露したので有つた。

『あゝ！左様仰有しやつて下さいませるのは嬉しいですが、けれども、是れが爲め妾の身が何うなるか却つて氣遣はしくなりました。今迄は妾は獨身で居ましたが、今からはね、二人ですわね。妾は自分の身が自

分の自由にならないのですよ。監督人が居て、とろくと警戒の眼を見張つて居ます。だから妾は貴方に拙宅へ入らしつて下さいといふことは言ひ度くても言へないので。左様ですわね、妾は貴方より弱いですが、れども年令は上で御座いますわね、ですから貴方は勇氣と決心を出して下さるし、妾は私達二人の相互の爲めになる様に妾の常識を働かせませうね。今何處に被居しやる？』と女は息も繼がないで疊み掛けた。青年は高等旅館に居ること、並びに其の町名番地を告げた。彼女は何か頻りに頭を撚つて居たが遂に斯う言つた、

『解りました。貴方は屹度妾の言ふことを聞いて下さるでせうね？』

サイラスは屹度聞きませうと熱心に返事をした。『左様すれば明晩』と彼女は面白相に微笑して見せて、『貴方は何處へ

もお出にならないで、是非御旅館に居て下さいね。そして誰かお友達がいらしたときは、何とか其の時出任せの口實で直ちにお断はり下さるのですよ。貴方の旅館の門は十時に閉まるのでせう？』

『十一時です』

『では十一時十五分に御旅館をお出なさい。たゞ門番に開けて呉れとお言いなさい。決して門番と話をしてはならないのですよ、話をなさんと露見るかもしれませんからね。それから傍目もふらず真直にルクザンブルグ公園とブルヴァーと會て居る町の廻り角の處に入らつしやい、彼處で妾は屹度お待ち申して居ますから。今申し上げた通りに寸分違はず被成つて下さい。で若したゞの一點でも其の通りして下さいらないと、まあ缺點と謂つたら、たゞ貴方に逢つて貴方を愛したとい

ふことしかない此の一婦人の身の上に退引きならぬ迷惑をお掛けなさいますことになりまますのですよ、宜いですか。』

『併し私は何の爲に那樣なになくはならないか了解りません。』とサイラスが言つた。

『貴方は既う亭主氣取で仰有しやいますのね。』と彼女は扇で男の腕を叩きながら言つた。『何卒か御辛抱なさつて下さいまし！』今少し経つたらそれも事實となりまますでせう。女は遂には男に服従するのを好くのですけれども最初は自分の言ふことを聞いて貰いたがるもので御座います。何卒妾が御願した通りに爲さつて下さいませ、それでなければ何んなことになつても妾はお構ひいたしませんよ。いや今考へ附きました、』と今度は恰かも困難を豫知したと謂はん計りの態度で附け加

へた、『妾は押附がましい訪問客を退けるまだ宜い考を思附きました。番人にね、明晩貴方の處へ誰も通さない様にお話しなさい——尤も借金取は別として——そして門番に貴方の仰有しやる詞を眞面目に受けさせる爲め、恰かも其の面會を可厭がつてお出になる様に幾らか力を入れ
て仰有しやいな。』

『侵入者に對して自己防禦をする位のことには私だつて大丈夫遣りますから御安心下さい。』と青年はむつと一言つた。

『それがお打ちぢや御座いませんか。』と女は冷淡に答へた。『男の方は随分我儘勝手ですわね、女の名譽なんか尠しもお構ないのですわね。』

サイラスは顔赤くをして聊か頭を垂れた。それも彼は友人に觸れ廻

はして羨しがらせて遣りたいといふ底意が有つた矢先斯う言はれたから有つた。

『兎も角貴方がお出掛になる時は、門番に何も仰有しやつてはなりませんよ。』

『夫は何故です。今の貴女のお話し中其の點は一番軽い箇條ではないですか。』

『貴方は最初妾が御依頼した事柄の眞意をお疑になりましたが、今左様仰有しやいますことから推察致しますと其の他の點が大切なことはお解りになりましたのですな。御不審の所も屹度役に立ちますよ。段々お解りになるでせう。そして若し貴方が那樣な事位最初から拒絶なさいますとすれば、貴方の愛情はたいしたものではないと存じますわ。』

サイラスは説明と辯解を一時に遣らうとして随分狼狽の爲體で有つた。此の時女は柱時計を見上げ兩手を拍つて息を凝らし乍ら叫んだ、『おやまあ！斯様なに遅いのですか。最う妾は一寸とも愚圖々々しては居られません。あゝ女は何んと可哀想なものでせう。妾は之丈で既う貴方の爲めに随分酷い危険を冒したのですよ。』

斯う言つて女は種々と狂氣染みた芝居を演り、時には接吻したり、又時には現を抜かした様な不躑の顔付を見せたりして今一度先の指圖を繰り返して説明し、それから別れの辭を告げ群集の中に消え失せて了つた。

サイラスは此の婦人は屹度伯爵夫人だと思つて居たのだから堪らな

過ぎた。晩景になつたとき彼は總て約束通り几帳面に實行して、指

定の時間迄にはルクザンブルク公園の廻り角の所に到着して居た。處

が誰も居なかつた。サイラスは通行人や其の近邊を徘徊して居た人の

顔を一々氣を附けて見て、三十分間も待つた。それから隣のブルヴァ

ーの廻り角へも行つて見た、そして公園の垣を悉皆一廻した。併し彼の

腕に取附いて来る美しい伯爵夫人の陰さへも見えなかつた。仕方が

ないもんだから、可厭々々乍ら自分の旅館の方に引返したが、其の途

中彼はマダムゼプリンがあゝの金髪の青年に取り替はした言葉を思ひ出

して何だか不安の念に襲はれた。

『誰も皆家の門番に嘘を吐かねばならぬのかしら。』と彼は考へた。

旅館に着いて呼鈴を鳴らすと、門番は寢巻の儘で出て来て入口を開

けて呉れ、そして燈火を遣らうと言つた。

『あの方は最うお歸りでしたか。』と門番は訊いた。

『あの方?』誰のことだ?』とサイラスは今夜一杯喰はされたのでむづとして居た所だから、幾らか語氣も荒々しかった。

『私はあの方が出て行つたのは到頭見ませんでした。併し貴方はお拂被成つたでせうね。此の館では借金を能う返さない様なお客はお出にならないのですから。』

『何を言つて居るのだ。お前の言ふことは少しも解らない。』とサイラスは恐ろしい權幕で有つた。

『借金取りに來たあの金髪の丈の低い、若い男の方。私の謂つて居るのはあの方のことです。他の人が來よう筈はないぢや有りませんか。』

貴方は私に借金取以外には入れてはならないと仰有しやつたでは有りませんか。』

『だつて、まあ、那樣な男は無論決して來なかつた筈だ。』

『何と仰有しやつても來ましたのは事實です。』と門番は無頼漢の様な様子をしてぐるぐると舌で口の内から頬を突き乍ら答へた。

『那樣なことが有るものか、無禮者奴!』と叫んで自分乍ら少し酷く言ひ過ぎたとは思つたが、何んだか容易ならぬことが起つては居ないかと當惑し乍ら、振り向もせず眞一文字に階段目掛けて走り上つた。

『ぢや、燈火はお入用でないですか。』と門番は訊いた。

併しサイラスはたいした走りに走つて、第七階の頂段に來て、彼の部屋の入口の前迄遣つて來た。其處で一寸息を繼いで、偕て中に這入

らうとすると、何とも謂へない氣味が悪くて這入るのが殆んど可怖い位で有つた。

何が居るのだらうと思ひ乍ら、愈押開けたときは眞暗で何も見えなかつたので一先づホツとした。そして何うも人の居相な氣合もしなかつた。やれ〜と長い溜息を吐いて先づ〜此處に斯うして安全に家に歸つて来たからは、最う今日遣つた様な馬鹿氣たことは之が始めてのお終ひ又一と一生遣るまいと確く心に誓つた。彼は燐寸が寢床の側の一小卓子の上に載つけて有つたことを思い出して、其の方向に手探をして進んで行つた。其の時再び不安の念が俄かに襲ひ來つた矢先、何か障害物に衝突つて仰天したが、それがたゞの椅子で有つたので一先づ安心した。遂に彼は窓掛に觸つた。微かに見分けることが出來た窓の位置



から考へて見ると彼は寢台の脚の所に居た譯なので、目的として居る卓子に達するには其の寢台に沿ふて手探りで行けば宜いので有つた。サイラスは手を下げて寢台に觸つた。併し手に觸つたものは雷單に掛蒲團のみではなかつた——掛蒲團が有つて其の下に何か人間の足様のものが有つた。サイラスは屹驚して腕を引き暫らくの間石の様になつて衝つ立つて居た。

『な—なにで有らう?!』

サイラスは非常に息を凝らして耳傾けたが、何も息をする音は聞へなかつた。彼は最う一度非常に元氣を出して、前既に觸つて見た場處に指の先を延ばして見た。併し今度は二三呎許り飛び退き、戦慄と恐怖とで全身固くなつて了つた。何か寢台の中に居た。何だか解らな

つたけれども兎に角何か居た。
 数秒間の後始めて彼は歩いて行つた。今度は彼は本能的に眞直に燐寸を掴まへた。そして自分の脊中を寢台の方に向けて蠟燭に火を点けた。燈火が附くと彼は可怖々々乍ら緩くりと向き變はつて寢台の方を覗くと、案の通り彼が想像して居たもの、中一番恐ろしいもので有つた。寢台掛はちやんと枕の上迄敷き延べて有つたが、一寸とも動かすに横になつて居る一人の人間の輪廓が浮いて居た。そして勇氣を出して突き進み敷布を撥ね除けて見ると、驚く可し、前の晩ブリエール舞踏場で見たあの金髪の青年で有つた。彼の目は開いて居たが生きた光はなく、顔は腫れ上がり且つ黒ずみ、鼻の孔からは血が少し許り流れ出て居た。

サイラスはアツと計り長い震へた泣聲を發して、蠟燭を落とし、そして寢臺の側に膝を衝いて倒れた。

此の恐ろしい發見に因つてサイラスは暫らく人事不省に陥つて居たが、入口の處で緩つくりでは有つたが、非常に注意深く扉を叩く音がしたので慚く我に歸つた。併し愈々本性に立ち返へるまでには中々の時間がかゝつた。それでサイラスは誰か這入つて來るのを喰止めようと急いで扉の處に行つたけれども最早間に合はなかつた。ノエル醫師は扉を緩くりと開けて這入つて來たが、見ると手には提洋燈を持ち、頭には寢室帽子を頂き、足を斜に歩を進め、顔を鳩の様に前や後ろに動かし、部屋の中につかゝと遣つて來た。

『私は何か叫び聲が聞えたと思ひました。それで貴方がお加減でも悪

いのではないかしらと心配して躊躇もせず遣つて来たのです。」

サイラス赤い顔をして、心臓を烈しく鼓動させ、お醫者と寢臺の間に立塞がつて居たが、何と答へて宜いか一向解らなかつた。

「貴方は暗い處に居て、しかも未だお休みにもならないのですね。醫者の眼で見れば解るのだから隠し立をしたつて駄目です。貴方の顔を見ると友達か、それでなくばお醫者か何方か、要ることが明に解つて居ます——一體何方が要るのです？先づ脈を拜見致しませう。脈膊を見ると心の様子も解るものです。」

醫師はサイラスの方に進み寄つたが、サイラスは後退して遠ざかり、手を差延べてお醫者の手首を掴へようとした。併し其の神經興奮が非常に強くなつて、最早耐へられなくなつたので、彼はふる／＼慄へて

お醫者を避け、床の上に打臥し、おい／＼泣き出した。

一方ノエル醫師は寢床の中の死人を見るや、心配相な顔をして、少し開けた儘にして置いた扉の處に急いで行き、手早く閉めて二重に錠を卸ろした。

「起きた！」とお醫者は荒々しい調子でサイラスに言つた。「今は泣いたり何かして居る時ではない。貴君は一體何をしたのだ？何うして此の部屋へ此の男が遣つて来たのだい。相談相手になつて上げるから、隠さず話すが宜からう、悪い様には決して取計らはないからね。私は今此の寢臺の上に居る一人の死人を見たからとて貴君に對する同情は少しも變はりはないのだ。まあ善く聽き給へ、盲目にして不正當な法律に問はばいざ知らず、苟しくも貴君を愛して居る人の目で見ると大

丈夫助かります。私は假令腹心の友達が人殺をして血腥い處から歸つたとしても、彼に對する私の愛情は一寸とも變らないのだ。左様何時迄も泣かないで起き上つた。』と言つて『善とか惡とか、一つの妄想に過ぎない。人生にはたゞ運命有るのみで、他には何もない。そして、何様な境遇にならうとも、最後迄一臂の勞を貸さうといふ者が貴君の側に居るのぢやないか。』

サイラスは此の醫者の親切に紆されて氣が落付き勇氣が出て、お醫者の質問を力に震ひ聲で到頭一部終始の事實を話した。併し彼は全く王子とゼラルチンの間の話は除いて了つた。それも其の話の要領は殆んど解らなかつたし、又何う見てもそれが彼の不幸に連關して居たとは思はれなかつたからで有つた。

『あゝ！』とノエル醫師は叫んだ。『夫は本當かね！若し左様だとすれば貴君は知らず識らず歐洲中最も怖ろしい人の術中に陥つたのです。貴君が餘りに正直過ぎるものだから、旨く落窶に掛つたのです。夫にしても斯様な目に逢ふとは随分危険な場所にうかゝと踏み込んだのですね！貴君が二度見たと言はれる其の英國人が此の度の謀略の源だと思ふが、一體其の人は何んな人で有つたか覺えて居ますか。若かつたか年取つて居たが、丈が高かつたか低かつたか。』

併しサイラスは好氣心が強かつたに係らず觀察力は乏しく、たゞ漠然たることしか言ひ得なかつた。それでは其の人を見分けることは出来なかつたのだ。

『私は觀察力養成と謂ふことを學校教育の一に加へて貰いたいと思

ふ！』とお醫者は怒氣を帯びて叫んだ。『若し人が自分の敵を観察する力なく、又其の容貌を話すことが出来ないとするれば、眼や口の用は何處にあるのです。私は歐羅巴中の悪漢仲間は大抵知つて居るのだから、貴君が今少し詳しく話せば、誰だか分つて来て貴君の防衛に對して新しい材料を提供して上げることが出来るのだが、實に惜しいことだ。今から少し氣を付けて此の方を修養せられたら宜からう。左様すれば屹度今から重大な役に立つことが有るでせう。』

『今からと仰有しやるのですか！ 今から私の行く處は絞首臺の他何もないのです。』

『誰でも若年の時は臆病神に付き纏はれるものだ。そして一寸した面倒が實際よりも怖ろしく大きく見えるものです。私は年こそ取つて居

るけれども失望なんか決してしません。』

『斯様な話をして警官が本當にするでせうか。』とサイラスは尋ねた。

『決して警官なんか話しはなりません。私の見る所では、貴君が巻き込まれた此度の陰謀事件は、警官の方では何うすることも出来ないと思ふ。其の上官憲の狭い眼識で觀ると貴君は確かに有罪です。そして分つて居ることは眞に未だ一部分でせう。屹度貴君に對して奸策を弄した一味のものは他に多くのことを遣つて居るに相違ないのです。だから若し屈けて了へばそれが一切探偵巡查の手に掛かり、貴君は何もして居ないにも係はらず、却つて罪を被せ掛けられるに極つて居ます。』

『すると最う何とも仕方がないのでせうな！』

『私は未だ貴君が助からないとは言ひません。那樣なうつかりしたことを私が言ふのですか。』

サイラスは死體を指差し乍ら醫師の言を反駁して、『併し之を御覽下さい私の寢臺の中に一向譯の分らない死骸が有つて、何うして處置して宜しいか分からないのです、恐怖しない譯には行かないでは有りませんか。』

『恐怖？否々人間は生命が失くなつてしまつてからは、私には、最う外科用の小刀で解剖す可き一箇の機械の様なものと思はれない。一度血が冷たくなつて流れない様になれば、最う人間の血ではない。一度肉が死んで了つてからは最う何等の愛情にも又何等の尊敬にも價しないものです。優雅とか、魅力とか、恐怖とか皆生きて居る間の事

で死んで了へば靈魂と共に消え失せるものです。那樣なものは平氣で見る様にならなけりや駄目です。能く聴き給へ若し私の考案が實行出来るものなら、今貴君が那樣な可怖がつて居る此の死骸に附き添つて居て貰はなければならぬのですよ。』

『貴方の御考案？ 何んなことですか？ 早く聞かせて下さい——私は此の儘では最う生長らへようといふ勇氣は殆んどなくなつて居る位なのですから。』

ノエール醫師は返辭もしないで徐ろに寢臺の方に向つて死骸を検査し始めた。

『全く死んで居る。』と低聲で言つた。『左様、私が想像した通り衣囊には何にもない。襯衣の名前も切り取つて有る。奴等は手拔のない様に



全く旨く遣つたものだ。丈が低いな、之は少し都合の宜いことがあるぞ。」
サイラスはお醫者の言ふ詞を非常に心配し乍ら聽いて居た。お醫者は遂に死體検査を了へ、椅子に腰を卸ろし、莞爾笑ひ乍ら亞米利加青年に話しかけた。

『私が貴君の部屋へ這入つてから聞いたり、喋舌つたり随分忙しかつたけれど、目の方も中々働かせて居ましたよ。私は先づ貴君の本國人が世界中到る處に持つて行く、あの素敵な品物が隅の處に有るのに氣が附いて居ます—あの旅行用大靴のことさ。今迄私は斯様なものゝ効用を考へ附かなかつたが、處が今やつと解りかけて來た。抑々あの大靴は奴隷賣買の爲めか、それとも今出刃を使つたのを隠す爲めのも

のか、何ちらか私には解らない。併し、ハ、ハ、ハ、那樣な靴は人間の死骸を容れるには實に結構なものですね。』

『まあ、本當に那樣な冗談なんか言つて居る時ではないのです。』

『私は冗談半分に言つた様でしたが、其の意味は非常に眞面目なのです。それで先づ第一に靴の中に在るものを悉皆出して空にし給へな。』

サイラスはノエール醫師の權幕に壓せられて命此れ從つた。間もなく旅行用大靴の中に有つたものを取り出したが床の上は其の在中物で忽ち一杯散ばつて來た。そしてサイラスは踵を持ちお醫者は肩を持つて、其の死體を寢臺から持出し、やつこのことで二重に折り曲げ、體軀全體を空靴の中に押し込み、二人掛かりで随分骨折つて此の大きな靴の蓋を無理に押し附けて了つた。そしてお醫者が自分でそれに錠を

卸ろしたり縛つたりして居た間、サイラスは鞆の中から取り出したものを一部は押入の中に残り、抽出の箱の中に入れた。

『先づ是れで貴君を救ひ出す道條の第一歩は済んだといふものだ。』

明日―いや最う今日だが―貴君は門番に遣る丈のお金を遣つて彼の嫌疑を緩和させなければならぬ。そして他の安全なる解決に必要な準備は私に任せて置き給へ。そして今夜は夜明まで暫時私の部屋に來るがよい。私は無害にしてよく利く睡眠劑を上げよう。何をするとすも先づよく寝んで置かないといけないからね。』

翌日はサイラスに取つては一生、中一番長い日で何時暮れるか分からなれと思はれた位で有つた。友達が來ても皆面會を謝絶し自分は室内に閉ぢ籠り、隅の處に座つて氣を腐らし怨めし相に大鞆に目を附

けて居た。處が昨日迄隣の人に悪戯をした身が、今や、それと同じ悪戯を先方からせられる身となつた。即ち壁の穴が開けられて前日と反對にマダムゼフィリンの部屋から始終續け様に見られて居たので有つた。それを思ふと忽ち堪らなくなつて彼は遂に自分の側から其の覗穴を塞いで了つた。そして斯うして觀られない様にして置いて彼は悔恨の涙に咽び乍ら随分長い間お祈りをして居た。

晩景遅くなつてから、ノエル醫師は宛名の書いてない二通の封書を持つて部屋に這入つて來た。一つは可成長い手紙が這入つて居たらしかつたが、今一つには手紙が這入つて居ないかと思へる位薄べらなものでも有つた。彼は卓子の上に腰を卸ろして斯う言つた。

『サイラス君、今私は貴君を救つて上げる計畫を話して來たのです。聞

く處に依るとボヘミアのフロリゼル王子は數日間巴里の謝肉祭を御觀覽になつたので明日早々倫敦にお還りになるといふことです。すつと前の事だが私は運よくも王子の主馬寮の別當ゼラルデン大佐といふ方に何かの機會で一臂の勞を貸して上げたことが有るので、夫以來入懇になつて居るのです。如何なる理由で那樣な有難く思はれるに至つたか今貴君に話して聽かす必要はないと思ふが、たゞ彼は私の頼むことなら何んでも直ぐ遣つて呉れる人で有るといふことを言つて置けば澤山です。それで今貴君に取つて目下の急務は、あの鞆を其の儘で倫敦へ持つて行くことでせう。けれども税關を通るのが八釜敷くて迎も望はないと思ふ。併し私が思ふのには、王子といふ様な高貴の方の行李なら禮儀上無論のこととして役人の檢閲なしに無難に税關を通る筈

です。是に氣附いて私はゼラルデン大佐にお願した處大層都合な返辭を得のたです。即ち貴君が明朝六時前に王子の御旅館に行けば、あの鞆は王子の御荷物の一として運ばれ、そして貴君は御一行の一員として隨行することが出来る筈になつて居るのです。』

『貴君の言はれるのを聞くと私は既に其の王子と大佐とは見た様に覺えます。昨夜ブリエール舞踏場でお二人の會話を立聞したので。』

『それ丈知つて居れば澤山です、王子は何んな階級の者とでも一緒になるのをお好になるのだから。』とお醫者は言つた。彼は猶ほ、『一度倫敦に着いた上は貴君の仕事は殆んど終つたも同然だ。此の大きい方の封書の中に一通の手紙が有りますが、其の宛名は一寸書く譯には行かないのです。併し此方には貴君があゝの鞆を持つて行くべき家の所書き

がしてあるのです。其處に持つて行けば直ちに受取つて呉れて貴君には一向迷惑は掛かりません。』と言つた。

『あゝ！何うも有難う御座います、私は何う有つても仰有しやつたことに脊かない積りです。併し何うして那樣なことが出来るのでせう？ 貴方は輝いた前途の望を私に開いて下さいました、併しお尋ねいたしますが、私の力で那樣な手に餘る困難な事件の解決が出来るでせうか。お強請する様ですが、今少し何ういふことか知らせて下さいまし。』とサイラスは哀訴した。

お醫者は之を聞いて非常に可哀想に思つたらしかつたが、聽て—

『おい貴君随分出来ない相談をするのだね。併しそれはそれでよい。私は今迄屈辱には慣つこになつて居るし、又貴君に那樣なに色んなこ

とを言つて聽かせて置き乍ら此の注文を斷はるのは變なものだからいづそのこと打明けることにしよう。よく聽き給へ私は今こそたゞ一人で質素な生活をし、斯道研究にのみ身を任ねて居るが、若い時には、私の名聲は倫敦に於ける最も伶俐なる、そして最も危険なる人々の間に一時は鳴り響いたものです。そして私は外面上尊敬を拂はれ、又重要視せらるゝ中心人物となつて居たけれども、私の本領は最も秘密なる、恐ろしい、そして最も罪惡的なる事件の上に存して居たのです。今貴君の爲めに依頼狀を書いたのは其の時私に服従して居た仲間の一人です。彼等は方々の國の人々で、専門もそれ／＼違つて居るが、等しく皆怖ろしい誓ひをなし、それに依つて一同結束し、そして同じ目的に向つて働いて居たのです。此の協會の商賣は他ではない殺人で有

つたので、そして今貴君に話して居る此の自分は、素知らぬ顔をして居るものゝ、此の癡猛なる團隊の隊長で有つたのです。』

『何ですつて？』とサイラスは叫んだ。『殺人をした人？そして殺人が商賣で有つた人？ 私は何うして貴方と仲好になることが出来ませうか。貴方の助言を承諾するなど那樣な事をして可いませうか。癡悪なる罪を犯した老人！ 貴殿は私が若いし、又災難に遇つて居るのを見て、私を其の仲間に入れようとするのですか。』

お醫者は大層烈しく笑つた。

『貴君は中々氣嫌の取り悪い男だね。併し私は今、殺された方の仲間か、それとも殺した方の仲間か、孰れに附いて可いのか極めて貰はう。若し貴君の良心が明敏で私の助けを受入れないといふのなら、判然と

左様言つて呉れ結へ、私は直ちに手を引いて御免を蒙らう。それから先づ貴君は自分で満足が出来る様に此の鞆とそしてその中に在るものを處置せられる方が宜しいでせう。』

『いや何うも失禮なことを申し上げました、私が悪う御座いました。私は貴方に此の人を殺したのは私ではないといふことを御話し致す前に貴方が非常に寛大に私を庇つて遣らうと仰有しやつて下さいますその御深切に思ひあたり、有難く思つて貴方の御勸告に従ふべきで御座いました。』

『左様出られ、ば何も言ふことはないのです。斯うして貴君も段々と世故に通じて來るのです。』

『貴方は斯様な悲惨な仕事に慣れて御出になり、且つ又、私を紹介し

て下さる方々は貴方の以前のお仲間やお友人で被居しやるからは、い
つそのこと貴方御自身で、あの鞆の運送方を遣つて下さつて、私は最
う彼様な可怖い物に手を附けなくても宜い様にして下さる譯には行か
ないものでせうか。』

『慥かに貴君の御手並には心から敬服致しました。私は既に此度の事
件に就いては充分世話を焼いたのではないですか—貴君は何う思つて
居られるか知らないが。私の助言を其の儘で承諾するなり、拒むなり、
勝手にし給へ！。そして既うお禮などを言はなくとも宜い。私は貴君
の智力にも信頼して居ないし、又私に對する酌量など初めから思つて
居なかつたのだから。若し貴君が心身健全で今少し年配も行つた時は、
訖度、今の考とは全く違つて來て、今晚の行動に對して赤面する時機

が來るでせうよ。』
斯う言つてお醫者は椅子から立ち上がり、今一度簡單明瞭に指圖を
繰り返して聞かせ、サイラスに返辭をする猶豫も與へないで部屋を出
て行つて了つた。

翌朝早々サイラスは王子の旅館に行つた。するとゼラルヂン大佐が
丁寧ていねいに請しやうじて呉れて、そして、其の時から、鞆一切の世話をして呉れ
たから、サイラスは何等直接の恐慌きやうくわうを感ずることがなくなつた。旅行
中サイラスは船夫や鐵道赤帽等が王子の鞆が大層重たいそうおもいといつて小言を
言いひはしないかと、夫計そればかりりに耳聳め、そはだて、びく／＼者もので有あつたが、別に大
した出來事できごともなく濟すんで行つたので一先安心まづあんしんした。そしてフロリゼル
王子はたゞ大佐と二人で別に居る様にしたから、サイラスは汽車の中

では王子の從僕と一緒になつて行つた。併し汽船の中ではサイラスは積み重ねて有る大靴の山を凝視めて、是から先何うなるものかしらと始終不安の念に満ち、如何にも憂鬱相な態度をして居たので、遂に王子の注意を惹いた。聽て王子は大佐に向つて、

『彼處の若者は何か深い事由が有つて彼様な悲し相にして居るに相違ない。』と言ふと

『彼は殿下の御一行と一緒に旅行するお許しを得ましたあの亞米利加人で御座います。』

『あゝ左様かそれでは私は知らない顔はして居られないのだ。』と言つて、フロリゼル王子は、サイラスの方に進んで行き大層丁寧に斯う言つた。

『ゼラルデン大佐の話によると貴方は我等と御同行御希望といふことでしたが、此度それが愈叶ひましたのは何より結構と存じます。又何時か斯様なことになしにもつと重大な事でお役に立つことが出来れば實に本懐の至りで御座います。』

そして王子は亞米利加に於ける當時の政治問題に關して二三の質問を發した。それに對して、サイラスは前後を取り亂さず、且つ禮節に適つた返辭をした。すると王子は、

『お見掛申す處貴方は未だお若い様ですが、お年の割合には大層眞面目で被在しやると思ひます。多分貴方は長い間眞面目な御研究も被成つたのでせう。といふものゝ萬一今私の言つた中お氣に觸はる様なことが有りましたなら何卒勸免して頂きたいものです。』

『私の様な不幸なものは広い世界の何處を探しましても又と御座いますまい。そしてそれには相當な理由が御座いますのです。まあ世の中に私の様な潔白な人間で斯様に悪様に騙されたものは又と二人は御座いますまい。』

『私は貴方の内證事に就いて訊きたいのではないのです。併し私はゼラルデン大佐の紹介さへ有れば何んでもして上げ申すのですから、何卒御安心なさい。それ計りでなく事によると實際に於て他の多くの人々よりも一層お役に立ち得る種々の便宜も有つて居ると思ふのです。』サイラスは斯かる高貴の方から深切に言つて貰つて衷心嬉しくて堪らなかつた。併し彼の心は間もなく憂鬱性に立ち歸つた。王子といふ様な偉い方の心盡しの好意でさへ遂に物思に沈んで居た此の共和國人

の氣苦勞を取り去ることが出来なかつたので有つた。

一行を乗せた列車は、チアーリングクロスに到着した。其處で税金取立の役人共は、平世の通りにフロリゼル王子の荷物を検査しないで通した。大層立派な鹵簿が待つて居て、そしてサイラスは、他の者と一緒に馬車に乗らせて貰ひ王子の宿所に行つた。其の旅館でゼラルデン大佐はサイラスを大勢の中から捜し出して、自分の大恩人なる例のお醫者の友人サイラスに對して幾分の力を盡し得たことを喜んで居ると話した。

『貴方の陶器が壊れて居なければ好いが、王子の御荷物と一緒に特別に氣を付けて取扱ふ様に驛々へ命令が傳へて有つたのです。』
左様言つた後大佐は召使に一つの馬車を此青年紳士の爲め用意し、

其の車掌臺の上に旅行用大鞆を載せ彼が欲する處に送り届ける様に指圖し、自分は宮家の御用が有るからと言つて青年と握手して別れを告げ奥の方へ這入つて行つた。

サイラスは宛名の這入つて居る封書を開けて堂々たる馬丁に向つて、ストランドに通じて居るボックスコートに行けと命令した。馬丁は其の名前を聞いて屹驚した様な顔付をし念の爲め命令を今一度訊いたが、其の様子は其處は全く無案内ではないらしかつた。サイラスは贅澤極まる車の中に這入つたものゝ、胸の中は却つて心配で一杯になり乍ら目指す所に行つた。ボックスコートの入口は狭い歩道で馬車は到底通れなかつた。そして其の路次の兩側の柵の端の所には杭が一本宛立つて其の一方の杭の上に一人の男が腰を掛けて居た。其の男は直

ちに飛び下りて御者に手を揚げ挨拶の取替はしをした、其の間馬丁は馬車の扉を開けてサイラスに大鞆を何處に持つて行くのか又第何號へ届けるのかと訊いた。

『何卒、第三號館へお願します』とサイラスは言つた。

馬丁と杭の上に座つて居た男と、それにサイラスを加へても其の大鞆を持運ぶには随分骨が折れた。三人でやつとのことで例の家の入口迄持つて来るまで、サイラスは多くのぶら／＼男が見て居るのに氣が附いて當惑した。併し彼は出来る丈平氣を装つてコツ／＼と扉を叩きそしてそこを開けて呉れた人に今一つの封書を差出した。

『此の方は今御不在で御座います。併し若し此の御手紙をお置きになつて、明朝早く被在しやれば、私は貴方が何處で何時頃此の方を御訪

問被下つて宜いかお知らせ致しませう。あの鞆を置ってお出なさいませうか。』と其の取次は附け加へて言つた。

『おや左様ですか。』とサイラスは叫んで、急いで来たことを後悔した。『おや左様ですか。』とサイラスは叫んで、急いで来たことを後悔した。『おや左様ですか。』とサイラスは叫んで、急いで来たことを後悔した。』

見て居た大勢の人等はサイラスの優柔不斷を嘲り笑ひ悪口しながら後に跟いて馬車の所まで遣つて来た。そしてサイラスは恥かしいやら怖ろしいやらで胸がくしゃくしゃして居たから直ぐ近隣の静かな且つ氣持の宜い旅館に連れて行つて呉れと馬丁等に頼んだ。

従者等はクレージン街クレージン旅館に連れて行き、たゞ其の旅館の使用人の手にサイラスを打やらかして、直ちに馬車を驅つて出て行

つた。其の時旅館にはたゞ五階に一つの小さな裏向の部屋が空いて居たのみで有つた。それで此の部屋に二人の大男の荷運夫が非常に骨折つて且つ小言を言ひ乍ら例の旅行用大靴を運んだ。勿論サイラスは階段の上までずつと彼等の後ろに喰附いて護衛して行き、廻り角を通る度に手に冷汗を握つて居た。といふのも萬一一寸でも踏み外す様なことが有つたときは靴は欄杆の上から送り落ちて、下の玄關の鋪石の上に由々しき内容を完く晒け出して了ふかも知れないと心配したから有つた。

當てがつて貫つた部屋に着いてから、彼が今迄耐へに耐へた胸の苦悶を鎮める爲めに寢臺の端に坐つた。併し彼が漸く座を占めたとき、靴磨が遣つて来て靴の側に跪いておせつかいにもぐるくと縛つて有

つた靴の革紐を解き始めたので又々恐怖の念に引き戻された。

『それは其の儘にして置いて貰ひませう！』とサイラスは叫んだ。『私は此處に滞在申其の中から取出すものはないのですから。』

『そんなら玄關の處に置いても宜かつたんだね。斯様な素敵に大きな重いものを：』とその男は呟いた。『中には何が有るのか俺にや分らないが、皆お金で有つたら擅那は俺よりや餘程金持だな。』

『お金？』とサイラスは急に小氣味を悪くして言つた、『お金とは何だ？私はお金なんか持つて居るものか、君は一體何を言つて居るのだい。』

『よく言はしたね擅那、』と靴磨は瞬し乍ら『誰だつて擅那のお金に手を掛けるものですか。俺なんか那樣なことは大丈夫しませんよ。』と

附け加へた『併し靴が重かつたから何です—一つ—祝酒を擧げてもが
いと思ひやして：』

サイラスは四十法のお金を取つて呉れといつて強いて手渡し、そして未だ着いた計りで外國の金貨しかないので氣の毒だと切りに辯解して居た。すると男は前より酷い勢で呟き出して、如何にも金が少いと謂はん計りに、手の中の金と大靴を交互に見比べて居たが、遂に不承々々々で行つて了つた。

其の日に殆んど二日間例の死體はサイラスの靴の中に締め込んで有つた。此の不幸なるニューイングランド人は獨りになつたとき靴の裂目や、孔を、一生懸命に注意して臭いで見た。併し幸にも氣候が冷かであつたが爲め、靴は未だどうやら彼の身震さす様な秘密を洩らさない

で居て呉れ相であつた。

彼は靴の側に椅子を寄せ、手で顔を掩ひ、非常に深い思案に暮れて居た。若し早速誰かの手で救はれなければ遠からず事實が曝露するとは分り切つたことであつた。始めて来た町に友人も無く、共謀者もなく、たゞ一人で居るのだから、若しもあのお醫者の紹介状が役に立たなかつたときは、彼は全く此の廣い倫敦の中で絶望の人となる譯だ。彼は將來の野心勃勃たる計畫を専心回想して見た。若し此度のことか失敗に了らば彼の生れ故郷なるメイン州のバンゴル選出の議員となり、名聲を轟かすことも出来ないであらうし、又年來心に描いて居た官海を涉獵してとん／＼柏子で榮轉することも出来ないであらうし、又合衆國の名聲隆々たる大統領となり、死後ワシントンの議事堂を裝飾

するあの「最も不出來な」塑像を遺すといふ希望など皆断念しなければならぬかも知れない。而して彼は今此處に斯うして旅行用大靴の中に二つに折り曲げて有る一人の死んだ英國人の爲めに身動もならない有様になつて居るのだ。此の物から脱却しなければならぬ、然らずんば合衆國大統領の表中に加はることも出来なくなるのだ！

私は此の青年がお醫者や、殺された人や、マダムゼフィリンや、旅館の靴磨や、王子の使用人等、約言すればあの怖ろしき災難とは非常に掛け離れて居た人々に向つて言つた随分酷い數々の恨みの言葉を記録するのは如何かと思ふから此處では差控へることに致しませう。

夜の七時彼は晚餐の爲め、宿の人に知られない様に下りて行つた。併し心此處になかつたから見るもの聞くもの一として驚の種とならぬ

者はなかつた。珈琲室が黄色に裝飾して有つたので彼は先づ戦慄した。そして他のお客は何んだが嫌疑の眼を以つて自分を見て居る様に思はれた。そして彼の心は常に階上の旅行用大靴の側に在つて何としても之を忘れることが出来ないもので有つた。廳で給仕が乾酪を持って來たとき、彼の神経は既に非常に興奮して居たものだから、之を見て屹驚して椅子から飛び出し、憐れや三合取つた残りの酒を食卓掛の上にひっくり覆へして了つた。

彼が晚餐を済ましたとき給仕は喫煙室に彼を請じた。此の時實はサイラスは直ちに「危険な寶物」の許に歸りたかつたのだが、折角の深切を無にする勇氣が無かつたので、瓦斯燈の照いて居た煤けた汚ない穴藏に下りて行つた。此の穴藏は其の時クレーブンホテルの喫煙室にな

つて居た。今も多分其の當時の儘だと思ふ。

偕て其處には二人の大層悲し相な人が賭をして玉突を遣つて居たが、其の側にはじめくした肺病やみの點取人が附いて居た。其の時サイラスは此の三人丈が此の部屋のお客だと思つて居た。併し見廻した處が、豈に計らんや、向側の隅に一人の人が居て、少し伏目になつて居たが、非常に森嚴な且つ謹慎な態度で悠悠々々喫煙して居た。サイラスは一見見覚えの有る人だと思つて熟々見ると、服装こそ悉皆違つて居たけれども、其の人こそボックススコートの入口の杭の上に腰を掛けて居た男で、馬車に鞆を上げ下しするのを手傳つて呉れた人だといふことが分つた。それと知るや、此のニューイングランド人はすぐ方向轉換をして走り出し、眞一文字に彼の寢室に驅戻つて、堅く錠前を

かけ、誰も来ることが出来ない様にして中に立籠つて了つた。
 其の部屋で、夜中、彼は、最も怖ろしい想像の犠牲となつて、死肉
 で一杯になつて居た、不吉の鞆を見守り乍ら、種々の妄想に耽つて居
 た。靴磨が金で一杯だと言つたことを思出しては更に新しき種々の恐
 怖を生じ、眠らうと思つて目を閉ぢたけれども妄想は仍且盛に心に浮
 んで来た。又ボックスコートから来たふら〜男がああ煙室に居た
 ことや、又彼が確かに變装して居たことなど思ひ合せて自分は又々ま
 んまと乗せられて譯の分らない陰謀危計の中心點になつて居るのだと
 も考へて夜の目も眠られなかつた。

夜は正に深更時計は既に十二時を過ぎ幾つか鳴つた。其の頃何とな
 く不安の疑念に迫られたものだから、サイラスは密かに寢室の扉を開

けて廊下を透し見た。廊下はたゞ一つの瓦斯管の火で薄暗く照らされ
 て居たが、其の光に依つて見ると、一寸先の方に、一人の男が旅館の
 下廻りの様な服を着て床の上に眠つて居たのを認めたので、サイラス
 は趾端で忍歩き、其の男に近づいた。彼は軀を半ば横にして打伏し、
 右の前腕で見知られない様に顔を隠して居た。サイラスが其の上から
 覗き込んで居たとき、男は急に手を御ろし、其の目を開けた。見れば
 其の男は又もやボックスコートのふら〜男で有つたので彼は尠から
 ず吃驚した。

『ヤア今晚は。』と其の男は愉快相に言つた。

併しサイラスは喫驚仰天して何う返辭して宜いか解らなかつたもの
 だから、黙つて其の儘自分の部屋に歸つて来た。

朝方になつて、彼は心配で疲れ切つて、體を椅子に靠らせ、頭を靴の方に向けて寝込んで了つた。那樣な窮屈な姿勢で、且つ、彼様な酷い枕なるにも係らず、彼は非常に好く寝て、日長くる迄目覺めなかつた。餘程遅くなつて漸く起されたが、それも扉を酷く叩く音の爲め覺まされたので有つた。

サイラスは急いで行つて、扉を開けて見れば、例の靴磨先生が立つて居た。

『昨日ボックスコートに行かつしやつたお方は檀那で被在つしやるかね。』と彼は訊いた。

サイラスは身を震はして行つたのだといふことを告げた。

『然うすると此の手紙は檀那に來たのだ。』と雇人は云ひ乍ら一通の封

書を手渡して去つた。

サイラスは直ちに封を切つて見れば中に斯う書いて有つた、

『十二時。』

彼は時間通りに行つた。大靴は彼が到着する前五六の丈夫な使用人の手に依つて運ばれた。彼は一室に案内せられたが、其處には一人の紳士が向むきになつて暖爐の前に立ち温まつて居た。多くの人々が出入する物音や、靴が板敷の上に置かれたときの刮る音等中々騒がしかつたが、不思議にも、其の人には何等の注意も惹起させなかつた。そしてサイラスは、恐怖の極、自ら進んで言葉を掛ける勇氣もなく先方が自分を認めて詞を掛けて呉れるまで暫らくちつと立止まつて待つて居た。

五分間も経つたと思ふ頃、紳士は漸く緩くりと向き變つたが、誰やらんそれはホヘミヤの王子フロリゼルの顔で有つた。王子は厳格な調子で、

『貴君は何の合はす顔有つて此處にお出でになつたのです！ 貴方は御自分で大罪を犯し乍ら、其の罪を逃れようとして地位のある吾々に附いて御出になつたのでせう。そして昨日お話を承つたときのあの貴方の困却の状も今よく解りました。』

『御尤で御座います、併しまあ聽いて下さいまし、私はたゞ災難に遇つたといふのみで、他に何も悪いことをした覺は御座いませんのです。』

と言つてサイラスは少し口早に聊かの隠し立なく、此の度の災難に

就いて、一部始終を王子に打明けた。

『私は全く勘違をして居ました。』と王子は話を聞き終たとき言つた。

『貴方はたゞ犠牲になつたに外ならないのです、私は貴方を罪する筈はないのですから、力の及ぶ限り屹度お助けいたしませう。さあ、』と詞を續け、『始末を附ませう。先づ鞆をお開けになつて在中物をお見せなさい。』

サイラスの顔は見る／＼變つて來た。

『私はそれを見るのも可怖い位です。』

『否、』と王子は答へて『貴方は既に在中物を一度見たのではないのですか、那樣な可怖がるといふことは感傷癖の人には普通有り勝で、それには抵抗しなければならぬのです。未だ盡力甲斐の有る病人な

らば兎も角、最早援助も、加害も、愛憎も、逆も及ばない死んだ人は吾等の感情に何等直接の同情を惹き起さしめるものではないでせう。確かりし給へ、スカッドモーア君。』と勵ましてもサイラスが未だ躊躇して居るのを見て王子は遅緩しく思ひ、『何時までもぐづぐづして居られると、私は致方なく命令としてさせますぞ。』と附け加へた。

左様言はれて亞米利加青年は夢から覺めた様に正氣附いたもの、何としても可厭で堪らないので、ふる／＼と戦慄へながら、大鞆の紐を解き、錠を開け始めた。王子は其の間平氣な鞆をし、手を後ろにして、側に立つて見て居た。死體は非常に硬くなつて居た。そして鞆の中から其の死體を取り出し、其の顔を王子に見せるに至るまでのサイラスの氣苦勞骨折りは實に容易なものではなかつた。

フロリゼル王子は夫を一瞥するや見るも氣の毒相な驚愕の叫聲を擧げて二三歩後退した。

『あゝ！おい、スカツダモーア君、君は大したものを持つて來て呉れましたね。此死體は私の隨行員の一人で實は私の親友の實弟です。彼が斯く非道の最後を遂げたのも結局私の命じた仕事に従事して居たからです。可哀想なゼラルデンよ。』と獨言の様に言つて、『私は何の面目有つてお前の弟の斯くなつた始末を話すことが出來よう？彼を斯様な悲惨なる非道の死に至らしめた無謀の計畫を立てたことに就いてお前に對し、又萬象を食し召す神様の御目の前で私は何と御詫をして宜いであらう？嗚呼、フロリゼル！フロリゼル！何時汝は道德的生活に適合する謹慎の徳を學び、欲してならざるなき權力といふ心象に目が

眩まなくなるので有らう？ 権力！』と彼は頓悟したものの、如く『私より権力の少ない者が何處に有らう？ スカツダモア君、私は自分の犠牲にした此の青年を見ると自分乍ら王子と謂つた處が案外腐甲斐ないもので有ると思ひます。』

サイラスは王子が痛まし相にして居たのを見て氣の毒に思ひ、何か言つて慰めようとしたけれども、遂に堪らなくなつて急に泣き出した。王子はサイラスの其の優しい心根を見て可愛想に思つたから、進み寄つて、彼の手を取つて言つた、

『まあ左様泣いては可かない。吾等はお互に今から確かり修養しなくてはならないのです。そして兎に角今日お目に掛つたのを御縁に一層立派な人間になる様に努めませう。』

サイラスは王子の詞にほだされて慕はし相に王子を見上げ暗に感謝の意を表した。

『ノエル醫師の住所を此の紙片に認めて下さい。』と王子はサイラスを卓子の側に連れて行き、『此の度巴里に歸られたら最うあの危険な男との御交際をお避けになつた方が宜いでせう。併し彼が此の度の事柄に關しては中々寛大な精神で遣つたのだといふこと丈は確かです。若し彼がゼラルデンの弟の死に就いて窃かに與り知つて居たとすれば決して死骸を主謀者に送る様なへまなことをしない譯です。』

『主謀者！』とサイラスは喫驚の餘り我知らず言つた。『實に左様です、全能の神の攝理に依つて不思議にも此の手紙が私の手に入つたのですが、元來これは誰あらう主謀者たるあの忌々しい自